川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Senryu Zasshi

pensoj flugas trans la land - limon

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿三年十二月一日發行 第三卷第十號
（毎月一回二日發行）
創刊大正十三年一月・通卷二百六十號

No.260

十二月號

續川柳講座（19）

麻生路郎

川柳に讀み込まれた俳句の季題

川柳を無季俳句だと称してゐた人もありましたが、今ではそんな考へ方をしてゐる人は一人もありません。それはごく大まかな云ひ方で、俳句から季を除去したからと云つて、それが川柳になる訳ではなく、それと同じで、川柳へ季を入れたからと云つて、これ又俳句になる訳でもありません。ただ川柳と俳句が同じやうに十七音字の形式を採つてゐるので、そうした論者はその差違を季の有る無しによつて差別したのに過ぎません

俳句は主として自然を対象として作句いたしますので季感を特に尊重するところから勢ひ季題と云ふものを生じ、遂には季題によつて作句するやうになつたのであります。それほど季題にもたれかからない人達でも、季がなければ俳句でないと云ふやうな観を呈したのであります。ところが、川柳では主として人事を詠むので、句の多くは季感を取入れる必要もないし、又その餘地もないのであります。従つて季感を取入れることは自由だが、それが季題とまでに発展しなかつたのであります。しかし俳句の季題をそのままとりいれたと云つてもいゝ句が、かなり沢山あるのであります。でも川柳の立場からは、それは季題として取上げてゐる訳ではありません。「川柳歳事記」などと云ふ本が刊行されてゐますが、これなども、俳句の季題によつて、句を拾ひ集めたのに過ぎないのであります。

次に俳句の季題が詠み込まれた川柳を例示して少しく意見を述べて見ませう。

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう　（路郎）

福壽草松にしたがひ候かしこ　（霞乃）

バスガールはみ出て春の風を切り　（綠之助）

日の永さ思へば古き掛時計　（榮公）

車窓暖かチルチルミチル頬並べ　（形水）

行水のそこを閉めてと女の子　（石竹）

尋ね人浴衣のまゝと書いてある　（湧三）

蚊帳の蚊も實は出口を探してる　（聽松）

結局は月など要らぬ呑仲間　（多）

落鮎はタマキ・三浦と云ふ妻　（八歩）

秋動き出すと大きな帶を締め　（豆秋）

十二月又前だれを踏んで立ち　（かほる）

金貨の殺されもせず十二月　（滿潮）

「元旦だ」の句の「元旦」、「福壽草」の句の「福壽草」がそれ〴〵新年の季題であり、「バスガール」の句の「春の風」、「日の永さ」の句の「日永」、「車窓暖か」の句の「暖か」が春の季題であり、「行水の」の句の「行水」、「尋ね人」の句の「浴衣」、「蚊帳の蚊も」の句の「蚊帳」と「蚊」が夏の季題であり、「結局は」の句の「月」、「落鮎は」の句の「落鮎」、「秋動き出すと」の句は「秋めく」が秋の季題であり、「十二月」の句の「十二月」、「金貨の」の句の「十二月」は冬の季題であります。しかしこれ等の新年、春夏、秋、冬の句は何れも、俳句の季題によつて作句したのでないことは云ふまでもないのであります。假りに「元旦だ」の句を例にとつて見ますと、俳句なら上五文字を「元旦や」と置きたいところでせうが、川柳では「元旦だ」と「だ」に特に力を入れて居ります。そして「せめて眼鏡を拭きませう」と云ふこの作者にとつて特殊な事件が、この場合の「だ」を單なる、や！の意味にとどめないで、過ぎ去つた三百六十五日の悪戰苦闘を力強く描出してゐるのであります。従つてこの場合の「元旦」は「元旦」であつてこそ句が生きるのであつて、二日の朝であつても、三日の朝であつても川柳としての妙味は全然失はれてしまひます。その點、「元旦」が俳句の季題であらうとなからうと、それは問題ではないのであります。しかし元旦の持つ季感はこの句の句意を、充分に強めて居ると思ひます。「福壽草」の句にいたしましても、福壽草を所謂季題的に取扱つてゐるのではありません。福壽草即作者自身であつて、夫唱婦隨の心境を巧みに描出してゐるところに秀吟となつたのであります。「バスガール」の句は情景を寫すに妙を得て居ります。しかも「春の風」と云ふ季感を出した語彙の助けによつて明るい感じを鮮明にしてゐるのであります。「日の永さ」の句は眞ッ先に「日の永さ」の五文字を置き、「思へば古き掛時計」としみ〴〵と掛時計に見入つてゐるところに、日永であることが、ピッタリと嵌つてゐると思ひます。作者は勿論、古時計から自分の過去を引ッ張り出して夢ごこちになつてゐるのでせう。

「車窓暖か」の句は、車窓からのぞいてゐる男の子や女の子の幸福そうな顔を見て、男の子や女の子の代用に青い鳥のチルチルとミチルを借りて來たのであります。この場合の「暖か」もよく利いてゐると思ひますが、これとても別に俳句の季題をとり入れた訳ではありません。「行水の」の句も「行水」といふ語彙は俳句の季題ではありますが、女の子の行水そのものに俳味を感じたのでなく、女の子の心理の動き方を行水によつて摑んだ川柳なのであります。こんなところにも川柳と俳句の相違點があるのであります

「尋ね人」の句にしましても、一つの穿ちとして浴衣が詠まれてゐるのであつて、季題としての匂ひは一つもしないのであります。

「蚊帳の蚊も」の句には「蚊帳」と「蚊」と云ふ二つの季題が詠み込まれてはゐますが、この句も、特に季題に重きを置いてゐる訳ではないのであります。蚊帳の中で蚊が飛び廻つてゐるのは、人を螫すためではなく、実を云へば蚊も出口を探がしてゐるのだと作者の皮肉な観方に中心點があるのであります。「結局は」の句も、月そのものを詠んだ句でないことは説明の要があ

男女両性に作用する
プレホルモン
錠剤・注射・皮下　塩野義製薬

りませんが、月見と云ふ行事と呑むこととの結びつきによつて、興味のある句となつたのであります。

落鮎と云ふのは産卵をし終つて流れを下る鮎のことであり、秋の季題となつてゐますが、「落鮎は」の句は、作者が三浦環と落鮎との対照に興味を持つたのであつて、これ又それが季題であらうと、なからうと問題ではないのであります。

「秋動き出すと」の句は「秋めく」と云ふ季題にふさはしい表現でありますが、これとても、作者の関心は女の大きな帶の美しさにあるのであります。

「十二月」の句は歳末のあはただしい情景を前垂を借りて詠んだものであります。この句などは次の「金貸の」句と同様に、十二月と云ふ季感が句意を非常に強めてゐることは事実でありますが、これとても季題としての十二月を詠んだのではありません。しかし、句によつては季感の描出が重大な役割をしてゐることに氣づくのでありますが、句によつては俳句の季題が読み込まれてゐるにも拘はらず、何等季感の束縛をうけてゐないと云つてもいゝ句もあるのであります。次にその例句を擧げてみませう。

片隅に蒲團を積んでおくくらし　（欣一）

〃高が合つてうどんの箸を割り　（稍露）

すき焼と見えて船頭葱をさげ　（路郎）

懸しさを話す火鉢は手を握り　（庄之助）

お二階を起して火事を見て貰ひ　（藍之助）

帽子だけ先に二階へ上つて居　（無心）

蒲團は冬の季題でありますが「片隅に」の句では何等季感の束縛をうけて居りません。蒲團を入れる押入れさへないと

次に擧げた「〆高が」の句のうどん、「すき焼と見えて」の句の葱、「恋しさを」の句の火鉢、「お二階を」の句の火事、「帽子だけ」の句の帽子も又冬の季題でありますが、何れも季感の束縛をうけてゐないのであります。この點から見ても川柳に詠み込まれた季題であつてもいゝので、〆高が合つたので、ヤレ〳〵といふ氣持ちになり、うどんの割箸を割つたと云ふ穿ちに興味を感じた作なのであります。

「すき焼と見えて」の句にしても、船頭が葱をさげてゐるのを見て、すき焼をするのだなアと想像した輕い穿ちの句なのであります。

「恋しさを話す」の句も作者は矢張り穿ち句として興味を感じてゐるのであります。

「お二階を起して」の句にしても「帽子だけ」の句にしても何れも穿ちの句です。火事も帽子も季感に縛ばられてゐないところが、俳句とは全然趣を異にしてゐると云はねばなりません。それから、最近と云つても一九四八年の春の事ですが、須崎豆秋氏の主唱で俳句の季題を川柳に、どの程度まで、こなすことが出來るかといふ試作が行はれましたが大した成功は見られなかつたのであります。

例へば「淺春風景」と云ふ題では、

手袋の片つぽ落し春になり　（豆秋）

税金のことで咲いてるのも知らず　（同）

アベノ橋汽車の煙も春になり（水客）

等の句が出來、「滿開」と云ふ題では

汽車の窓一と枝ほしいとこを行き　（水車）

曳船へ右も左も咲きみだれ　（豆秋）

滿開の下で財布をとられて來　（水客）

などの句が作られました。そして「葉櫻」と云ふ題は

葉櫻の頃に割勘言うて來る　（幽王）

引揚者葉櫻に泣き無事に泣き　（水車）

などが出來ました。以上の句の中では豆秋氏の「税金のことで」や幽王氏の「葉櫻の頃に」の句が川柳としてこなれてゐるのではないかと思ひますが、名作家豆秋のいつもの持ち味が充分に出てゐるとは云へません。折角の試作も、俳句の季題は矢張り俳句のものであることが、ハッキリ判つたのに過ぎません。川柳は何処までも雜詠として自由に詠むべきものであります。たゞへ作句練習のために題詠をするとしましても、所謂川柳らしい課題を選むべきだと云ふ結論を發見したやうに思ひます。

不朽洞句帖

麻生路郎

長物語子が学校へ行つてます
地方落銀座のはなしたのしめり
少女又読んでいただく手紙書く
何も彼も焼いたと談す娼婦型
駅を出てひとりを感ずひとりを感ず
無力な男みすのやうにちぢかんだ
無心など云はずに裏の裏に住み
恋の打撃を東京へ逃げ
老夫婦芋に不平もなき日なり
俺の妻にしては少々みすぼらし
失禮々々君の奥さんだつたのか
くすぐつたいよ紙入なんかあづけられ
諦めてもらつた夫ですと云ふ
追放を結句よろこぶ妻を持ち
未亡人けふも涙の浪費して
心臓の弱き結婚詐欺にされ
東京を思はじ恋を思はじ
アメリカと斯うも違うかスタイルブック

云ふ、生活狀態を表現する素材に過ぎないのであります。住宅難で間借でもしてゐるのでせう。この句は季感の束縛をうけてゐないと云ふ例句にはなりますが、佳吟だとは云へません。

が、必ずしも俳句の季題と同じものでないことが首肯し得られるでありませう。

「〆高が」の句にしても、冬の夕にうどんを食ふことの情景を詠んだと云うのではなくて、それは冬であつてもいつ

最も御利用度の高い
大丸の商品券
三都に夫々どこよりも充實した店を持つ大丸の商品券は皆様に最も喜ばれております
京阪神三店共通・一階商品券賣場
大丸
大阪心斎橋・電話南一三一

川柳塔

大阪市　武部香林

流し樂團都会のあがきのやうに揺れ
給與水準どこ風が吹く人の群
說教の受け賣りをする四十過ぎ
松茸狩仲居の方が美いおべべ
抱いた兒が泣いて男を悲しめり
白米を蠅の野郎になめられる

湯淺邸に招かる（三句）

萩乱れ夢の世界に我れ居たり
谷二つ向うに亭のある生活
靜けさは碁石の音もこだまする

大阪府　米本貴志子

經驗に耳も借さない育兒本
おくどさん光らせ代々養子です
狹い村クシャミをしてもひゞくなり
お月さん敗戰國の團子です
虫の夜半宇宙の廣さ思はされ

奈良縣　上田翠光

吹殼の哀れは水に捨てられて
チンドン屋の顏に雲りはなかりけり

兵庫縣　戸倉普天

駅の時計今日も不良のまんまなり
人相もいつしか闇屋らしくなり

横濱市　福田山雨樓

笑い声僕に似てゐた一周忌
運命の指十本が細長し
沈默はこゝろよきかな肺青し
子規をまねて三度々々の膳を書き

尼崎市　水谷鮎美

若かつた頃の秋だと思ふ也
鰹節昔ながらの音で削げ
棚のものおろして見たり秋しづか

布哇　内藤草一郎

メールマン日本の愚痴を持つて來る
あそこへと云へば知つてる運轉手
引眉毛酒に煙草によくしやべり
音のせぬ電氣時計は親しめず
子を五人連れてかつての女神居る
寂しいねレイ草臥れて午後のバス

旭川市　宮田不二

御機嫌のなゝめを生徒知つてゐる
物價にはうとく先生板につき
不機嫌はノミを逃してまだ続き
重態は好きなラヂオも氣に障り

奈良縣　西垣錦風

雨宿りそこにへちまがぶら下り
大阪の船場と云ふに箒草
貧乏をしながら詐欺にかゝつてる

平塚市　木村孤浪

いゝ女アレ〳〵こゝが空いてるのに
タイピスト急に無口な月曜日
白足袋のこはぜは兎角無理にかけ
落葉踏む音許りさせ一二町
打ち解けぬわけは近頃金が出來
天ぷらは家でなかつたのかと靴をぬぎ
膝枕馬鹿にされてる夢は見ず

そんな手相あるのかと兩手ぢつと見る
ブギウギで紅いりんごが忘れられ
甘えない子にまゝ母はチェッと云ひ
お座敷に二十も化けて女將が出

大阪府　西尾栞

お年忌に愚僧愚僧と猪口を受け
恋人は刺客のやうにより添ふて
電灯がついて内職向をかえ

大阪市　市場沒食子

理に勝つてお金に背を向けられる
老舗屋になんぼでも家ありはあり
妻も亦哀れ継だらけの寢卷
鼻柱の強い子お前誰に似た
どこからでも酒代はひねり出し

名古屋市　吉田水車

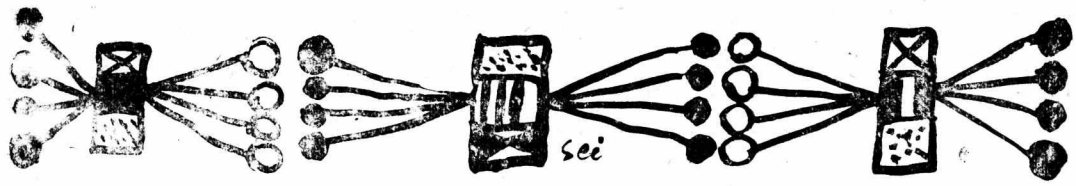
配給所わざ〳〵こぼすらしく見え
轍今蟻の努力を断たんとす
ニュールック趣味も個性もあらばこそ
それぞれのすがたに還へる便り來る

大阪市　須崎豆秋

金もろた方へ政治はころぶなり
膏血を湯水のごとくあつかはれ
パンパンのみさおと政治家のみさお
泥棒へ一票いれたのはだれだ
どんな顏して肅正の訓示やら
組閣成る町會ほどの顏ぶれで

大阪市　竹内潮花

瀬戸内を絵にしてバスは雨となり
三味も彈けお花も活けて喰ひはぐれ
編んでゐるそばて亂歩を読んでやり
秋の雨おむつの下で寢かされる



滋賀縣　北川春巣

曾遊の地なり轉地をすゝめとく
医者として虫の知らせを否定せず
ほめようがなく純情な娘とほめる
うんかの被害へかゞし無駄に立ち
一等旅館を買出しに尋ねられ

奈良縣　尾崎方正

べちやくちやと喋り看護婦のガーゼ切り
ありふれた顔だ女よ子を産むさ

下關市　櫻川不水

零細のヤミに五人がホットする
心機一轉ヤミ街道を驀進す

大阪市　菊沢小松園

PTAやつぱり金が物を言ひ
銀行の金庫と此処は壁一重
叱られたまゝのかたちで寢てしまひ

大阪市　清水白柳子

お月様たばこ卷いてておかしかろ

姫路市　夷一笑

書記長だ個人だ耳がたこになり
教會へ自作の茄子を提げていき
コスモスの咲く迄待てすかたすける
平穏の色にまたゝく誘蛾燈

大牟田市　高田抱逸

何くわぬ顔で課長の片思ひ
左ぎゝ桶屋で喰へる腕をもち
役得の話へ町内ちさくもめ
役得の疲れへ課長遅刻する
火葬場の順にも役得ある話
闇からの縁で経済飲みに來る
家政婦の小さい口から洩れた闇
顔捨てる覚悟儲けを思ひつき
遠く聞く三味へ昔の馬鹿を知る
頬杖でねむる國会あてにならず

兵庫縣　德永雅美

大阪へ這出す夢を捨て切れず
思ひつきり笑つてみたしインフレの世に
ヒロイン氣取りでさつそうと出る映画館

大阪市　木下幽王

子を抱けばどこのどなたか褒めてくれ
兒を褒めて欲しさにおじぎさせてみる
肺病へこれがあんたのお箸です
肺病へわしも俺もと体驗者
此の家で生れましてん壁のしみ
ひきつゝた笑顔は腹のわだかまり

鳥取縣　中島鉄洲

残念な事に朝鮮語も出來ず
女房に勝ちを譲つて飯にさせ
相談に來れば儲かるとは云えず
たまさかの儲を妻に誇りとす

大阪市　橋本美奈子

共学の野球かなきり声を上げ
夏休み終い机にしがみつき

出雲市　尾綠之助

大言非語酒の功德の一つかや
芋ばかり喰べてねた子の顔の艶
疑獄とはかなしい浮世の物語

大阪市　水谷竹莊

相談へ金のあるのはよりつかず
女房の友達みんな話好き
お茶屋から闇取引はお立ちなり
だん〳〵と覚悟がにぶる末亡人
米のあるあいだは妻のよいきげん
ぎり〳〵の招待券は人にやり

帝銀事件

人相がほくろ一つでうたがわれ

廣島縣　廣津柳慶

新婚と同じ列車でてれさせる

内助の功認めながらも二号置く

大阪市　稲葉鳩花

ちび〳〵とやりたいやうないゝ月夜
別れ際わ女へ雨が降りそゝぐ

鳥取市　杉谷湖山

キリギリスチョンと句切つた草いきれ
百姓の眞似してトマト皆枯らし
雷の中眞直にペタル踏む
ストッキングのまんま炊事の朗らかさ
給料をさげすみ闇の群に入り

下関市　國弘半休

憲法がどうのこうのと青年部
多數決明治生れが口惜しがり
朽ちる氣で働く者も不安な日

兵庫縣　小沢史葉

名月に一駅歩くバスを降り
ハイキングこんなとこにも秋の村
オフイスの隅萬年処女といふ姿
序文でも書けと閑居をたずねられ
日記には接吻した事書いてなし
餘震なほつゞくで土に子をかばひ
赤貧の見本の様に恩師やせ
月給と相談しろと取りあはず
なりゆきにまかしまつさとストの朝
灯火したしむ当直鼠小僧読み
裏口へ女將残暑の水を打ち

兵庫縣　小西無鬼

火を貸した上に新聞借りられる
病院の樹わ物干に使われて
手洗所女辛棒強く待ち
心して見ればねぶかの眞直な

神戸市　大鶴喜由

めつたに〳〵女をほめず
はようウインクせな他人が嫁る母の氣の

女房の身もちを頼む興信所
アップヘヤー俺故ならば叱られず
引かれ行く女將ふて〳〵しく笑い
排発の言葉がうまい四十過ぎ
駈落ちはしたし轉出まゝならず
わい談しばし一割値切つて來

大阪市　吉田斜水

歳なんか金さえあれば嫁きますわ
阿呆らしい話も継いで電話事務
當直の天使に芋を招ばれたり
飲んで喰ひ自辨は裸踊りだけ
看護婦の入院藥など飲ます
百圓のおもちやだ泣かすに見ておくれ
君と僕チョッピリだけど酒は酒

新居浜市　在間小樓

教育委員候補者へ
一票も子のためと知る父と母
復興博の一等賞当選者へ一句
孫の孫までかたりつたへる家が出來
應接間復員者としての眼がうごき

高槻市　手島一舟

抱き方が悪いと母は氣をつかひ
界隈で綽名で通る人を訪ひ

吹田市　野本呑水

年寄りの着付け白足袋美しい
なやましき世に工員で直う生き
リンタクはその若さごと眼でわらひ
毛虫囲んで逞ましい子等の意氣

布施市　糸本醉月

停電を又内閣のせいにする
急患へ自轉車のパンク持てあまし

布施市　大塚一球

ひとゝきの情熱は消え子が二人
喰ふだけが能だがやはりやせてゐる
清貧をあざける如く税が來る
貯つても貯らなくても子が生れ

尼崎市　早川聽松

追放に家史の編纂思い立ち
みなが湯に入ると日給では足らず
何が氣に入らぬか胡瓜ヒン曲り
読む暇が出來たら金の方が無し
碁にこるも妻に死なれてからの事
停電をしようとすまいと陽は沈み
轉任に官舎の菊はまだ蕾
早起きの隣り養子がつゞくかナ
旅客機の外は要らない世を希ふ

奈良縣　白牛奇朗

経済がどうのこうのと生んでゐる
夕月へ一升さげて行く大和
貰ふ子を見に行く女房髪を結ひ
東西進め南北止れ情なし
貯つたと見えて氣になる通貨処理

岡山縣　山分北路

とうもろこしの様な女が赤い靴
これが長女ですもう二十六
月が出て女は下をむいたまゝ

愛媛縣　月原宵明

秋の雲療養所から美しい
秋の陽がわずかに残るかくれんぼ
美しい様だが財を持たぬ村

下松市　山根白星

税務署がいんで鹽まく眞似をする
わらじからヒント得たよな靴で來る
さけ、さかな、ルートは云ひつこなしの宴

瀬戸市　鈴木みきを

藥よりボールがきいた兒の病
卵をうむので命びろいした鷄
稲妻の下に故郷の山があり
朝の母つかぬマッチと取つくんで

廣島市　石原伯峯

御神輿がバラック街で派手すぎる
お祭の話題乏しき座に招ばれ
母の瞳よ不甲斐ないとものたまわず

滋賀縣　藤田わたる

女の兒血は爭へぬ化粧する
秋晴れを妻とは違ふ女と來
行樂の帰り子が寢る親が寢る
買出しを諭す巡査の髪白し
恋知つてからの船員降りたがり

○

松山　前田伍健

結婚の理想街錄笑はせる
急停車線路に笑う子がぽつん
少年の夢ターザンと連れになり
檄文は自筆惡筆丸をつけ
留守番のつれ〴〵糊と鋏あり
誰れも居らぬので牛の声を眞似
くしやめする眞正面なる山の雪

大阪市　橋本綠雨

取締まる人も裏道歩むなり
禪などと云はなくなつた儲け口

清水市　冨士野鞍馬

佛壇へ闇で儲けたともいへず
雲泥のちがひ戦後の久し振
田舍バスだまつて切符とつりを出し

句評 どこへ行く道

安川久留美

川柳に、平凡と平淡の差異あることわ私の從來しばしば述べる意見であるが、平凡と紙一重である平淡こそ川柳の有つ輕味をより以上に詩化した作品と見做す。本誌十月号川柳塔より一例の句を示せば先づ丹路氏の二句がある。

この道はどこへゆく道子を伴れて

四季いづれともいえる郊外散歩を連想する。中七の表現によつて特に「春」よりも秋の「小春日」に芒ナヨ〳〵と靡く鄙でわないか、あえて作者のセンチメンタリズムも想われ、決して都會のアスハルト道路とわしたくない平淡句である。

馬は田にいくさは既に終りたり

この句のよさわ、終戰のことを冒頭にいわず、上五をいとも自然に田園敍景を表し、止め八字いかにもかるく且つ和かに些の技巧なき點、到底凡句として扱えず、長年の川柳趣味に作句努力がみえる。

對山をわが庭と見て午乳うまし（山雨楼）

右わ作者の病床吟らしいが、山の起伏を遠く勇大に見て、「わが庭」と誇張的に吐露したところに得がたい川柳素がふくまれている。哀れ對山の雲を友とする冷酒一杯でなく「牛乳」のラッパ呑み？に皮肉な人生わ躍つている。

私わ曾て「左りの眼潰り自分の　を見る」てふ主觀句を発表して先輩三太郎氏に「いゝ句だ」と賞められた時もあつたが――鼻の句としてより良き見つけ所の佳句を発見した。夫れは水谷鮎美氏の作

握手して鼻と鼻とのひかりよう

で、双方の鼻を單なるスケッチと見るよりもその刹那何れにも微汗さえあつて、いかにもエネルギッシュな、いふべく言われざる川柳味を有つ之れも丹路氏作品と同じく平淡な秀吟とするに躊躇せない。

須崎豆秋氏の作にわ、いつも注意をはらうのであるが、今回の十一句中にわ、

温泉で遊んでねても汗が出る

が白眉のやうだ、勞働でわなく贅沢な汗を諷した句の力わ亦捨てがたい川柳味であらう

茶代置き過ぎてふりむく旅の星（民郎）

自由律として着想の平凡を活かしたやうであるが、宿を出る瞬間の「靴を穿く」凡庸を詠まず、夜景の星に情緒を添えた點作者獨得の持ち味を見せて佳吟！更に佳吟として川柳塔より左の八句を拔萃した

自尊心の強さ女のおでこに見（方正）

明日もはくズボン枕の下になり（幽王）

野荒しにやられた夜は風をきく（同）

内閣は誰がいいのと女將喫ひ（竹荘）

財産が出來た證拠に犬を飼ひ（斜水）

ジャガ芋のくさられ世話に疲れきり（葭乃）

すきなものくれたがそれが毒なもの（伍健）

黍越しにれて見る雲も久しぶり（同）

終りに憎まれ口かも知れぬが左の三句わ面白いと思うが着想既に言いふるされているので、句を併記して參考に供することゝした。之れによつて今後の句作わ、丹路、鮎美氏らの長所を学ばねばならぬ點をうなづかるるとしやう。

いよう生きてたんかと久しぶり（水車）

命があつたんですかと久しぶり（金孤）

新聞の隅に小さく死んでいる（豆秋）

三面の隅に死んでる猫イラズ（久流美）

逢ひ引と知らず螢は飛び交ひ（一球）

逢曳にもつたいなくも星がふり（久流美）

盲評多謝

名文の三部作

吉田水車

牛肉のシンとなるスグ金融シス

これは電報文ではなく或新聞廣告の脱字がかもすナンセンス即「牛肉のシーズンとなる」のーズがぬけ「スグ金融シマス」のマが落ただけのものであるが何んとうまく出來てゐるではないか此方が余程効果がありそうだ、ついでに「タカラクジ」のタがないやつを出してくれたら名文の三部作であらう。

浮世絵の觀賞には是非古川柳に眼を通して置くと非常に助けになると思う。当地で展覽された際拜見したが就中吉原の風俗画等は恰も古句の説明をきくようによく判みし面白さも一入である。川柳翁のらんじゆく時代と浮世絵の頂点とほゞ時を同じくしてゐるのもうなづかれる。

デカ〳〵とした映画の廣告には專ら男女のほうようの外あまり見ない。あらゆる娯樂雜誌の表紙絵も亦美人のニューフエースか姿態ばかりである男女同樣もこゝでは男性の影がうすいこと。

歌舞伎すい亡論があるのは其責が何れにあるは別として何樣現代の觀客層にとつて觀劇手引とでも言う解説書がない限り一寸藝題名が難解すぎはしまいか。例えば「あしやどうまんおううちかがみ」とか「いろもようちよつとかりまめ」の如きをそらくこれ丈見ては何やらさつぱり判らぬであらう。もとより古典歌舞伎の特質は題名そのものにも表現されそれ自体がすでに劇の内容にふれてゐるものである。歌舞伎を理解さす一つの手だてとしてせめて六ケしい題名の解説があれば自然内容も判る訳である。歌舞伎は我等の過去の歴史である以上そうたやすくほろびるものではないし又そうならぬよう祈るものである。

麻生路郎著　水武書房版

最新刊

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆したたけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して敢むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好參考書であることは刊行前既に注文の殺到してゐたのに見ても明らかであろう。敢て一讀を薦む。

B6版　二一二頁　定價　一〇〇円　送費　金三〇円

取次御注文は　大阪市住吉區万代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雜誌社

川柳語原考（下）

——今日的意義と遡源的研究——

福田山雨樓

川柳の名を守る立場

われ〳〵が川柳の名を愛好し、支持し守りぬこうとする所以のものは、この詩の名称が適切であり、この上もなく親しく好もしいからである。同時に柄井川柳翁がこの道に一生を捧げた根強い精神を、われ〳〵の心として精進をつづけることに無限の誇りをもつからである。故小田夢路氏は「天下に誇る川柳の名称」と題して「川柳は文字から受ける感じ、釣合、調子、餘韻申分なし。柳によほどの縁があつて川柳と決るべき素質十二分」と讃えている。(註1) また紋太氏は「何故川柳と名乗るか、その奥には傳統が控えている。柳樽が控えていると云うことになると單に詩の発展のみを主張してばかりもいられない。又川柳の名の下に飛び込んだ最初の自分を考えて見るときに自分の持つているものと川柳とのつながりはどうであつたか。その後の発展は自由であつても最初のつながりを断ち切り得る境地に至つては、川柳とは縁なき衆生となるのではあるまいか」と述べてゐる。(註2) 更に石原青龍氏は俳詩小感と題する中で「川柳と云う名が俳諧の末流たる一個人の號に過ぎないからと云うことは、小生としてはどうでもよいことだ名として悪い響きを持つていないし、寧ろ名前に理窟が無くて氣がきいていると云われないこともない」と俳詩改称論者に反駁している(註3)

従來川柳の改称運動は一再にして止まらなかつたが、何れも長続きがせず沙汰止みになつている。俳詩とか寸句とかの改称が唱えられる毎に、却つて川柳と云う名称を擁護するこころが盛り上つてくるほどである。只、狂句と云う墮落した改悪の名は、所謂狂句百年の祟りとして、われわれ川柳家は古傷に蝕れるような、不快な氣持に襲われるのであるが、その狂句すらが、却つて川柳の立場を挽回し、昂揚する反動作用を爲したのである。改称運動に關連して「現時の川柳は只その名称を形式的にのみ引継ぐもので、それが發生過程において、自由創作吟である點等大いに異つている。そしてそれが生れる姿は、かの一語説の如き多數なるわけでなく、眞に一句の動かない句体となる。(課題吟は別である) かく時代の距りは、かく変遷し來ているのだから昔の川柳と現時の川柳とは雲泥の差がある。この點、川柳の名称を改む云々の論が興るのも發生的に考察し來ればうなづけ得る。(註4) とか「改称の眼目が假令、川柳は俳諧の嫡子である、と云う點におかれてあるにしてもその理由の大部分は、前記の姓名学(名詮自性、名体不離)による改名と合致している。本質論、純理論から云えば川柳と云う称呼は正當でない」(註5) などの所論もあるが、考えれば考えるほど、川柳と云う名称は適當であり、捨いがたいものであることを色々な方面から考察する事ができる。一、伊志田孝三郎氏はかつて(「川雑」所載)川柳と云う名を劍花坊とか角恋坊とかに、おきかえて見ると、いかにそれが滑稽であるかがわかる。とのべられ川柳の名を禮讃された二、川柳はかわやなぎの音読であるが、これは雅号の場

芋・芋・芋

木下幽王

「漢書週間で一番良く賣れた本は何だが知つてるかい」
「さあ」
「芋の料理全集」

○

お知らせ
「芋十貫目以上お買上の方に胃散無代進呈」
某縣農業横流協同組合

○

飼猫に芋ばかり食せて置いたらネヅミをとらなくなりました

○

芋と云ふ字を百あまり砂に書き
死ぬことをやめて帰り來れり
　　僞啄木

○

アベノ附近で夜な夜な焼芋の香がするとの思つたら
芋腹で死んだ人の火葬の煙でした

○

芋をよく乾してカンテキに使ふと配給の薪より安くつきます

○

「あら今日は珍らしくガスが出てゐるわ」
「ふん瓦斯会社の奴も多分芋を沢山食つたんだらう」

○

先生「こゝにお芋が三ッあります一ッたべたらあといくつ殘りますか」
生徒「ハイ何もありません。殘りは腐つて捨てゝしまひます」

○

たまに米の辨当を持つて來たら箸を忘れて來ました

○

「さあお晝の辨当ですよおにぎりはおやつの時にするのですよ」

○

「農林大臣は何故芋ばかり一時に配給するのだらうな」
「直ぐに小菅へ行かればならぬから身辺の整理をしたわけさ」

○

「公約、私が代議士になりましたら必ず一時に芋を配給するが如きへまな政治をやりませんから、次期総選挙には是非御投票を……」
「拍手」

○

來月の主食の配給は芋二十五日分但し殘り五日分は特に親心を以て辞退手続の煩雑をさけるべく配給せず

古川柳と忠臣藏

水谷竹莊

終戦後「仮名手本忠臣藏」が全面的に上演が可能になつたことは少しでも歌舞伎劇に関心をもつものは勿論、今後のわが國の演劇文化にとつても、まことに喜こぶべきことである。一口にいつて現在歌舞伎劇鑑賞の態度は、功利的なものにも奚ひされず、純粋な藝術のための藝術、演劇のための演劇の氣持ち、これによつてなんの雑音も入らずその本然の姿を鑑賞することになつたからである。むろん鑑賞の対象となるべきは、脚本を根底にしてゐながらも、その上に咲いた花ともいふべき「舞台藝術」なのである。その歌舞伎劇の生命は、つまり「舞台藝術」における「美の價値」であると思

合は通例と申さねばならぬ。貞徳をさだのりと云わないし宗鑑をむねかがみとは云わない。只芭蕉と俳句とは外に読みかえようがないことは面白い。

三、「揚柳の萌え出たこのごろの揚子江岸はきつと美しいに違いない」と元内務省土木試験所長安藤博士は云つている(註6)が中國は元より英國にもドイツにもフランスにも、そして世界の何れの地にも往古から柳はあつて、その美しさを見せたものである。

四、横浜から出ていた「知古」でかつて「選粒」と云う特選欄を設けていた。これはこぢつけのようだが、何だか川柳の本質に結びついたものがあるように思われた。宝暦の昔前句付勝句の嚴選振りを振返つて見れば、この選粒が意図するところはたしかに川柳の本質を衝いていると思う。

五、長野縣更級郡に川柳村(せんりゆうむら)と云う村がある。自分はこの村名を調べて貰つたが、これは石川、二ツ柳の兩字が合併して一つの村ができたのだとわかりがつかりしたことがあるが。それにしても川柳村とはなつかしい。(註7)埼玉縣にも川柳村と云うのがあるがこれは調査していない。

六、柳川鍋は泥鰌の料理であるが「柳の下にいつもどじようはいない」と云う俚諺からにおわせた、洒落れた名前であることもほほえましい。

七、川柳以外の書物の中で「古川柳に」とか「川柳子は」などと云う文字が見付かると何となくうれしく、愛嬌が感じられる。新聞で故郷の村の名を見るような郷愁がある。

(註1、番傘昭和十六年九月號。註2、川柳の名の下に、紋太氏、ふあらすと同十四年四月號。註3三味線草同年七月號。註4、川柳改稱論への試論——発生的一考察——石崎柳石氏、川柳國同十二年十月號。註5、故渡邊虹衣氏、番傘同十四年四年號。註6、同二十二年六月九日朝日新聞。註7、「川柳雜誌」同十一年十月號。)

結論

われ〳〵は傳統を尚び、傳統の中に育てられた川柳のエスプリを感じ、傳統の眞骨頂とするところを体して、温故知新現代にこれを生かそうとするものである。川柳と云う名称を尊重し支持し愛護して、その旗の下に川柳を文学することに誇りと興味をもちこの詩の中にある民主的精神——即ち憲法の精神をどこまでも盛りたてねばならぬと思う。

重ねて確認する。川柳の名は今日最早一個人のものでは決してない。個人を離れたみんなのものになりきつているである。これを守ることは川柳家の崇高なる義務であり。これを更に輝かしいものにすることは、川柳家が果すべき榮譽である。

數々の自由律川柳家が遂に川柳そのものを放棄した実例と思い合せ、この川柳語原の回顧によつて、われ〳〵は眞の川柳愛を識る。

紙業界の覇者フタバチエーン

藥用・化粧品用・あらゆる紙器

特殊紙器工業株式會社

紙カツプ及食堂用紙製品

フタバカツプ株式會社

大阪市阿倍野區晴明通一ノ四〇　電天下茶屋 2802 2808

あらゆる印刷

凹凸印刷紙業株式會社

大阪市阿倍野區松虫通一ノ一六　電天下茶屋2391

う。この美とは、絵画的性格をおびるといへる、したがつて歌舞伎劇ほど「舞台藝術」の純然たる「美」を尊重する演劇はないのである。

もつとも演劇の現実主義的内容主義の立場からいへばこんな歌舞伎劇など、演劇としてもの足りないといふ不満が起るであらうが。それとは話が自ら別となるわけだしかし、そういふ「美」を味ひ「美」に陶醉するといふことも、現代人の情緒的生活のうるほいとなると考へれば一部で難じる如く歌舞伎劇が現代生活とは全く隔離された無用の長物とばかりはいへないと思う。

その意味からいつて「仮名手本忠臣藏」などは最も「美」のすぐれたものゝ一つで、書卸し以來、その時代時代の多くの名優の手にかゝり数えきれない演出の度数を重ねて「舞台藝術」も完成されて現在に至つてゐる。

この「仮名手本忠臣藏」の狂言が大当りを占めてから、長唄、清元、常磐津、大津絵、音曲、落語等々に應用され、又色々の歌詞も出來、酒席も賑はしたものである。この外、詩歌、俳諧、雜俳、それ〴〵に忠臣藏を題材にしたものを集めたら大した数になる。その内でもだんぜん群を抜いて光つてゐるのは、何と言つても古川柳である。柳樽の古い所には少いが後の句には忠臣藏を詠んだ句が沢山ある。その中から巧いのを列記して見やう。

山科にゐて関東の脈をとり
吉良の寺あれかと指をさした切り
あさの中の蓬は四十七本なり
内藏之助嘘をしても医者に見せ
仮名書の手本に残るいゝ家來
そば屋の口書御火消と存候
墓参り樒を九十四本買ひ
泉岳寺水道普請のやうに堀り
ぞろ〳〵とそば屋へはいる四十七
ほんまの阿房ぢやないと一力屋
一字づゝ化げて屋敷の様子を見
軽石も一つ交つて義を立てる
錠まへの無いのが一棹由良之助
泉岳寺他宗もみんな引受ける
知れて居るものを数へる泉岳寺

これ位にして最も知られた名句

五段目で運の好いのは猪ばかり
五段目も又、原作では大した場ではないのだが歌舞伎にゝると頗る面白い。氣のきいた、長丁場の間に挟まれて喫煙室のやうな効果をあげる一幕であると同時に、錦絵的ポーズで終らせ原作と反対に定九郎の動きを省いて、勘平を多く動かしてゐる所に興味がある。

アメリカの駆虫薬

十二指腸虫
蛔虫
腸内寄生虫

アメリカ薬局方・四塩化エチレン

コメット

テトレン球

黒田製藥株式会社
大阪　東京

近作柳樽

配給の芋が玄關通らさず　岡山縣弓削平
不氣嫌に戻つて夫ラヂオ切り　同
待望の雨に家まで流される　同
百姓をして知る水の有難さ　同
流石にダンヒル悠々と火をつける　同
わが姉は一家の柱赤玉に　大阪市光甫
二部教授おそ出早や出と女給めき　同
大阪の端に生え抜き世をかこち　同
鏡臺も銀婚式の色となり　同
祝賀会上座ずらりとボスが占め　今治市一風
トイレット切符咥わえて髪を撫で　同
手土産はまがりくねつた山の芋　同
開け放つ障子の下に日本海　同
まだひとに踊りませうとまでゆかず　東京都三星子
ダンサーをしてるそうですだわかり　同
重役が自轉車でゆくヤミ会社　同
腕を組むサンダル實になつちゃん　同
雨の日の市営質屋え子を負ふて　大阪市草々
丸窓の月尺八と琴が合ひ　同
土産物買ふて細君だます氣か　同
平凡に安堵しきつたアッパッパ　同
食通と言ふは昔の事にふれ　名古屋鳳石
小額紙幣引出にほり込まれ　同
女ならこそインフレを苦にもせず　同
庭先へ少し竝べて古物店　同
よくよくの不運の樣に双生兒　新居浜默紅
縫ふよりは飾に置きたいミシンなり　同
近所隣仲よく大根に虫がつき　同
自動車に追ひすがりゆく風も秋　同
明眸の夫人に順を割り込まれ　小松市茶佛
税金を闇屋はうわの空で聽き　同
心配をするなそれから先きは嘘　同
藥瓶同志センチな歌を書き　同
レントゲン胸を見飽いたとは云はず　和歌山宏方
看護婦さん派手に笑つて叱られる　同
顔の色僞裝してゐるとは知らず　同
おもちや屋の店にも消えた戰時色　同
初対面同じ訛りを懐かしみ　長野縣柳兒
秋晴れへ軸替へた部屋風を入れ　同
子の財布にもさげすまれてる小銭　同
臍繰がもう続かない宝くじ　同
一すじの愛をつらぬく置手紙　長野縣文庫
その雜誌歳や身分に釣り合はず　同
親切を置き忘れてる宣言書　同
立読みの氣長に呆れ且怒り　同
肺だとか聞けば佗びしい立姿　大阪市梨里
理想など言はなくなつて世に馴れぬ　同
映画で見た人物が理想の人だつた　同
休閑地輕く病んでる人が立ち　同
不悪御了承とあれど腹が立ち　高知縣元馬
服全部盗まれたとて子が帰り　同
旅の餞一萬圓の入れ処　同
舊友に逢ふ嬉しさの酒肴　同
佗しやなシャツの穴から秋風が　宇部市栗美
生活の裏を覗きにチロロ來る　同
こうろぎに親しむダンサーチト哀れ　同
夢いくばくもなく栗落つる　同
母の出がよいので縁があつたとさ　大分縣表情
姑は直ぐ死ぬものにして嫁かせ　同
故郷なまり手もちぶさたの妓がねる　同
團体へ行く娘の寢相母は病み　同
小説の中の人情も地に落ちて　大阪市葉光
美顔術ですのと娘宵寢する　同
無慾になれと秋の空澄む　同
虫干に防空頭巾を笑ひ合ひ　大阪市のぶを
京極のビルの主の白い足袋　同
半ヅボン下駄突つかけてよく勤め　同
履歴書へ扶養家族をまづ問はれ　秋田市夕帆
俺たちの出した代議士値上する　同
髭のある養子へ世間口が過ぎ　同
泣いてゐるのにうたごうてうたごうて　大阪市定美
嫉妬ふとあらい言葉になつていた　同
勢力のない人間の平和主義　同
結婚の其の日に會社ストに入り　岡山縣七面山
無神論有神論で夜が明け　同
日記にも伏字を使ふ恋心　同
留守番の犬さえ恋にいそがしい　名古屋まさを
飯炊きも出來ずマルクス読む娘　同
三下り半きまれば女房よい女　同
時勢とは云へど許せぬ子の思想　高槻市丁路
アベックの一分の隙もない姿　同
又しても鼻が氣になる子が産れ　同
歌詞だけは違いなかりしのど自慢　鳥取市穂波子
八月の寢相老若男女なく　同
お祭りえ吾が臺所見栄を張り　同
インフレの姿五圓の銅貨です　大阪市春草
通勤へたゞ一足の靴盗られ　同
師の噂する暇があり女弟子　同
工面して買えば待つてるミシン税　今治市松花
手傳ひに行つてそのまゝ嫁になり　同

裸にもなつて鑛山視察團　同
モーターを買ふ借金は父許し　石川縣義　風
俺達の処世を危がる兄夫婦　同
初老すぎおやちらしさがあるさうな　論
爪紅く染めて女房のいゝ稼ぎ　布施市愛　同
儲けてることを云わずに新樂し　同
菊人形こゝにも恋の物語　同
喰ふだけでよいと轉業あわれなり　石川縣茶撫郎
轉業に女房も一品賣らされる　同
轉業に髯を落したくだけよう　同
登錄の切符へ妻の小さい義理　今治市滋　路
秋の蚊にふと空想をさらはれる　同
親切をこばんでもみる十八九　同
算盤は下手でも踊り上手なり　兵庫縣正　司
米持つて一莊やらうと泊りに來　同
ふるさとはすがりつきたいなつかしさ　鳥取市日滿子
子等やがて大人の躾指摘せん　同
震災の街映画のセット見る如し　石川縣光　郎
法規にはふれず人情巡査なり　同
貧しき虚榮リンタクにそりかへり　西宮市鈍　昧
シヤンだなと思へどヘンナ雜誌よむ　同
君が鷄をと無精者ひやかされ　貝塚市一　郎
淋しき事よ金万能と肯定す　同

友人逝く

事務的に書けない今日の診断書　大阪市康　夫
花で埋め愛読の書も入れてやり　同
自信ある顏へも一度コンパクト　大阪市良　子
齒の抜けた事まで子供書いて來る　同
イ、物を見つけた樣に流れ星　岡山縣笑　泉
役所だけ髭が物言ふ暮らしなり　同
靴へわが身を合す世の中　横濱市万　年
迂濶には死ねぬ世相を通夜で聽き　同
のど自慢女性益々あなどれず　愛知縣吐　平

寄附金の帳落ちさして怒鳴られる　同
委託品ばかりの店で復雜な　呉市甦　光
結局は前祝いだけ損になり　同
雨よ降れ〳〵都會は米を待つてゐる　愛媛縣早百合
弟を見つめて生きる親がわり　同
抱きつかにや賣れぬ新聞発行し　池田市木　声
他人の汗面白そうに見てる窓　同
喰ふためか喰はれる爲か身を落し　大分縣独　活
小使を兼ねても名刺支店長　同
税金をかせぐ農夫に誰がした　愛媛縣旭　童
芋の舟食糧といふ形でなし　同
日曜も土曜も知らぬ子沢山　大阪市ひさみ
おみくじは吉と出たけど逢へなんだ　同
春も過ぎ秋も過ぎして一人者　愛媛難千　波
まんぴつをふるう所で電氣消え　同
二三人乘せて一列殘される　大阪市恒　良
うつかりと坐つた椅子は布と板　同
萩の花散らしてくにの山を降り　大阪市花代子
玄人と言ふ襟足を見あかぬ灯　同
闇師今日ありついた職が税務員　長野縣鈍　巖
俺がかけた税金でないのに恨される　同

近火に駈けつけて

棟落ちて消防隊のシルエット　佐賀縣えいを

水害の現地にて

橋桁の後から箪笥も流れて來　同
戰災の燒け跡ストーブだけ殘り　兵庫縣薺　花
動力が見ても不作の稻をこき　同
ダイビングの形で壘審セーフにし　德島縣夕　鐘
孕んだとも言へず養子にくれと云ふ　同
復興へ先づ看板の勢揃ひ　大牟田風　浪
注射器は白衣の年を知つてゐる　同
大変に不躾ながら年を聞き　鳥取縣盈　之
奥樣があちうと妾はかまはない　同

もう云ふなお前の嘘に金を貸そ　布施市海洋人
落笹など手にとり見れば寒かりし　同
川そこを見ぬいた樣な釣り話　豊中市柳　堂
薩摩諸昔の樣な味になり　同
異性をば女医ひつゝかみ〳〵　熊本市室　久
女事務笑ひ通して退けになり　同
隱居の身で居れるのに子は戰死　石川縣醉　羊
指先をもて遊ばせて君と居る　同
ワンピースだんだん夏の色になり　石川縣味　平
これきりの轉業を又する氣なり　同
雜談がいつか恋しいひとに觸れ　兵庫縣花　子
恋いつか母を恐れぬ樣になり　同
大部屋のひとりは雨の窓へ立ち　兵庫縣萬龜子
水サラ〳〵と恋を語るにいゝひとき　同
偶然を偶然とせず宝くじ　大阪市美水洞
兄ちやんと呼ばれて見れば靴磨き　同
リヤカーなら一度で濟むを見榮があり　八代市夏　生
かゝる夜を殊更汽車の汽笛鳴る　同
襟脚を床屋冥利に剃つてゐる　大阪市梅　里
秋好み着物の會も時代らし　大阪市葉栄子
音もなく燕と共に夏去りぬ　大阪市桃　村
弱い僕だから佛を信じます　岐阜市巷　歩
看護婦を門に佇せて帰る幸　石川縣夏　波
久し振り逢へば結婚してる君　大阪市K　子
吹き降りへ着物の女緋がこぼれ　大阪市梅　風
○通○丁目にも葱蕪京都市乙　平
病身の希望段々小さくなり　佐賀縣八笑鬼
診察の母の乳房に子のすがり　兵庫縣艸　石
子供等の寫眞も掛けて永く病む　大阪市野　草
秋深し鐘の我にものを云ひ　大阪市純三郎
リヤカーに農具と子供共に乘り　石川縣東代女
遠足は僕も私も栗があり　石川縣魯　木
お名残りが惜しいと妓ぬかしたり　石川縣山　々

故岩崎柳路氏　川柳不朽洞会理事

柳路逝く

―諸家―

川柳佛　麻生路郎

柳路・岩崎武夫君が十月三日午前一時に、伊丹市下河原一六六の假寓で永眠した。行年五十有三歳法名は典誉武昌柳路禪定門。

○

柳路君が川柳に手を染めたのは大正十年八月で、当時私が担当してゐた大阪日日新聞の日日柳壇への投句であり、始めて句会へ顔出をしたのが、大正十一年二月五日に、大阪市東区内本町の商品陳列所楽樂館で開催された「大阪日日」主催の川柳大会であつたと云ふことである。この時、はじめて私は柳路君を知つたのである。

○

大体商人として終始してゐた柳路君は外交の才に長じてゐた。しかし才人の多くが才に斃れるやうに、柳路君も、その才を眞に生かすまでには幾度か蹴躓づいてゐた。そして、大阪を後にして、東上しその後、朝鮮、滿洲の放浪生活をつゞけ、滿洲で松代さんと同棲した。そして内蒙古へ進出、続いて張家口へ進出、こゝで始めて、事業が芽をふいた。幾変遷の労苦は酬ひられて、約十年間は物質的にも、社会的地位に於ても、恵ぐまれた生活をしてゐたが、好事魔多しの譬は君の一身にも及んで、終戰と共に、莫大な資産を張家口に残し一引揚者としてトランク数箇を携えて松代さんの郷里、伊丹市下河原の假寓に捲土重來を夢みてゐたが、晩春の頃から健康を害し遂に起たなかつたのである。

○

柳路君の成功の陰には松代さんがゐた。引揚後の松代さんの奮闘柳路君の一サラリーマンとしての生活には過去十余年間の君の生活振りを知るものにとつては眞に涙ぐましいものがあつた。

○

柳路君は寫眞の撮影に長じてゐ

柳路略年譜

明治二十九年(一才)▼三月二十五日大阪市此花区西野田玉川町に生る(本名武夫)▼学歴不詳

大正十年(廿六才)▼八月日日柳壇へ投句同十一年(二七才)▼二月五日日日柳壇の川柳大会に初めて出席同十三年(廿九才)▼「川柳雜誌」創刊と共に同社同人に加わる▼一月東京市芝区愛宕町大成社に移る▼同十五年(卅一才)十一月路郎主幹上京、駒人、千代二等と同人小集を催す。

昭和二年(卅二才)▼四月蛭子省二氏上京、同氏を圍んで東京支部柳話会を催す▼五月市外杉並町高円寺に移轉十月より芝濱松町建興商会に勤務▼同四年(卅四才)九月博覽会出品のため京城に旅行▼十月岐阜市西端町武林商会へ勤務。

同五年(卅五才)二月滿洲長春方面に旅行、その後ハルビンに落着き電氣医療機械外商に従事す▼「川柳雜誌」九月号に「千代二君を悼む」を執筆▼十月蒙古の鄭家屯方面を旅行。

同六年(卅六才)奉天に落着き奉天川柳界で活躍▼九月奉天省本溪湖支那街厚徳桟に轉居▼これより先松代さんと結婚▼十月撫順東二條通へ轉居。

同七年(卅七才)「川柳雜誌」一月号に「私と旅」を執筆▼「川柳雜誌」五月号に「ひろしさんナンセンス」を執筆▼四月庄万よし氏歓迎句会を催す▼九月奉天加志町大同ビル三〇号へ轉居。

同八年(卅八才)「川柳雜誌」一月号(創刊十周年記念号)へ執筆▼八月熱河省凌源西大街に轉居、土

★

柳路句抄

オブラート破れたと云ふ眼つき也

細帶の儘書留に印を押し

誘ひ人は茶漬かき込む音を聞き

慰謝料をとつても女氣がすまず

恐ろしい啓氣であつた夢が醉め

冷藏庫中をのぞいて一つ出し

レビューの列さつと変って手と手と手

猿廻し寺でいきなり断られ

鍵穴を覗けばドレスちらと見え

仲裁は堂に入つたる酒を酌ぎ

何はさて茶館へ飛ばす君と僕

いゝ仲居からかつてるへお手が鳴り

愛人と別れる術も人の道

今日此頃は盜泉の水も呑む氣也

蜂に刺れて植木屋お茶に降りて來る

人寄れば何んの配給かと覗き

馬でもいゝさと百匁の列へ立ち

文化臺所金屬性の音を立て

ハイキング炭焼く人に睨まれた

渡し舟山羊と一緒に島へ着き

超滿員パーマネントに撫でられた

病院に何の手術か名スター

男女同權背廣の社員等持ち

永病夜具の下から金を出し

結氷期すんだらといふ設計図

降る雪にいろはの二階客があり

た。「川柳雑誌」の表紙其他によつてその技術の妙を偲ぶことが出來やう。酒を深くたしなんだ。一番すきなものは映画であつた。各地を放浪してゐても川柳だけは捨てなかつた。張家口に落ちついてからは蒙彊新聞の柳壇を担当した。それほど川柳を愛してゐた。曾て私が「川柳雑誌」を有保証新聞紙法によつて刊行したい希望を実現させてくれたのも君の力だつた。君は深く川柳を愛すると共に、絶対に私を信頼してゐた。家庭の些事に至るまで私には洩らしてゐた君は至つて派出好きだつた。「世が世なら告別式に藝者でも聘んでやりますのに」と松代さんが云つてゐられたが、私も即座にうなづきうるほど派出なことが好きだつた

○

引揚後「川柳雑誌」に発表した君の句は全く人生の機微に触れてゐた。君が最後を飾るのに充分だつた。君が張家口に於ける十有余年の生活と、最後に殘した多くの佳吟を思う時、君も又瞑目して、うらみなしと云へるだろう。私は君に対して、箇人的立場から、語りうるものを余りにも多く持つてゐるが、それは他日に譲ることにしたい。

私はただ君の死によつて、大きなショックをうけたことをこゝに云ひ得るだけである。合掌。

柳路さんの記

東野大八

岩崎柳路さんが亡くなられた、いゝ知れない寂しさのなかに思い出すのは蒙彊の張家口（いまのカルガン）である。

「あたいは川柳雑誌と特別な関係がおましてな、路郎氏とは切つてもきれんなかですのや」と如才ない大阪人の言葉つきものごしで川雑を幾つも私の眼の前にならべて見せた。その卓に結構な料理と酒が並んでいた。彼が経營しているカフェーの畳のホールで、酒落たカーテンの窓の外を　キャラバンの鈴が通つていて、そのときこの地では初めての旅人だつた私を関西なまりと川柳の話で一ときの旅愁を忘れさせてくれたものだ。丁度今から一むかし前になるだろうか、このお接待ののちさる小料理屋で当時こゝの陸軍病院長だつた好紳士の小川静観堂氏と朔北の地に場ちがいな四疊半の日本情緒を味つたものだ。

「まあイーさんどないしてはつたんや」

と年若い妓に肩を叩かれ、ウーいと私にてれて、ツルリと鼻先をなでたそのときの柳路さんの万更でもない顔がいまも眼にうかぶ。それから数年後、私は張家口に轉勤になり、その地で一緒に暮すことになつた。何よりも喜んでくれたのが柳路さんで、やはりその地の柳人で、日本酒の醸造をやつていた山崎小鮎氏と三人で歡迎の小宴を張つたもので、いわゆる柳路コレクションと称するあの方面の珍品を特に公開してくれたのもこのときのことである。

寫眞が道樂で、結構な洋館二階建のホールの階上でよく寫眞展が催され、彼の作品が一番陽当りのよいところにいつも並んでいた。路郎氏と大同石佛に行つたことが忘れられないらしく、その寫眞を四度もひつぱり出して「石佛と路郎えゝやろが」としきりに自寫(?)自讃を惜しまなかつた。彼の寫眞を新聞や雑誌の口絵に時折のせると、かならず飛んで來て、お手のものゝ美女を侍らせ盃をさしながらその寫眞ばなしにうんざりするほど喜び感謝してくれた。

出征するときこゝろから別れを惜しみ、激勵して驛で手をにぎつてくれた、柔くて細いあの指先の感触を、いまもなくなつた片腕の底までのこつている。引揚げていち早くぜひ逢いたい、としきりに便りを貰い、私もあの柳路さんのよう動くチョビひげを懐しんだしいつか逢う機会のあることを心待ちし信じていたのについにその期に至らなかつた。

「多摩川の砂利もしいてる候爵家」といい短冊を貰つたことがあるが、そのとき酔つていた私は。

「あんたより奥さんの方が句がうまいぜ」

と冷かしたら、少し氣を悪くしたような顔ではあつたが

「あれもやつぱり川雑の同人でつさかいな」

と妙に悟つたような顔つきになつたその神妙さが、いまも悪いことをいつたと私はこだわつている。奥さんの松代さんにお逢いするのが今後のせめて彼に対する思慕の一つである。

柳路さん、あんたはとにかく義理がたく好人物で愛される人だつた、御冥福なさいませ。

（二三、一〇、一五）

木工事に従事。

同九年（卅九才）「川柳雑誌」四月号に「熱河の話」を執筆▼三月路郎主幹渡満の際撫順、奉天、大連に同行す▼五月令閨松代さん凌源小西街にカフェーモダン開業。

同十年（四十才）三月松代夫人と共に内地に歸省、歡迎句会の席上「熱河の話」を講演す▼四月張家口にカフェーオペラを開業。

同十二年（四二才）七月北支事變勃発のため凌源に避難す。

同十三年（四三才）一月北支張家口東安大街にカフェーオペラ復活▼六月宮尾しげを氏を張家口に迎う▼九月路郎主幹北支蒙彊、大連方面を視察さるるに際し同行す。柳路氏の撮影にかゝる寫眞数十葉、前後六回に亘り「川柳雑誌」に掲載

同十四年（四四才）一月小川部隊長「静観堂氏」と会談す▼四月蒙彊新聞柳壇の選句担当す。

同十五年（四五才）「川柳雑誌」二月号「オペラから」を執筆▼四月張家口市民團議員に選出さる▼「川柳雑誌」八月号に「蒙彊奥地涙源へ」を執筆「川柳雑誌」九月号に「支那の夜」「節米代用食」及び「感吟に就て」を執筆。

同十六年（四六才）張家口居留民團議員に再度当選す▼「川柳雑誌」二月号に「蛇に関する話」を執筆▼五月松代夫人と共に内地へ歸省、路郎主幹の吟行地調べに参加、奈良唐招提寺見学す▼六月北海道を巡遊す▼「川柳雑誌」八月号に「狸雑筆、或る秋の夜」を執筆▼九月蒙彊新聞主催寫眞展へ入選す。

同十七年（四七才）「川柳雑誌」一月号に「馬のべんがく」を執筆▼六月蒙彊商工会議所議員に当選す▼十月蒙彊官吏連盟主催官吏展に入選す▼十月同主催大東亞資源館出品寫眞展に入選す▼「川柳雑誌」十二月号に「十二月八日に訊く」を執筆。

同十八年（四八才）一月張家口日本居留民團議員に当選す▼三月店名を「東亞会館」と改稱▼十二月所用で北京へ出張青龍刀氏と柳談を交す、その後終戰迄消息委細不明、但し松代夫人は終戰前内地へ歸還さる。

同二十一年（五一才）四月巨財を打捨て張家口から北京を経て祖國に引揚げ兵庫縣下河原に落着く。

同二十二年（五二才）京都に勤務（七月路郎主幹が勤務先訪問）七月伊丹市下河原一六六に地名改称▼「川柳雑誌」九月号に「かほる君と僕」を執筆▼十一月神戸三之宮細田機械工業会社に勤務。

同二十三年（五三才）▼五月健康を害し、下河原の自宅にて静養、十月三日逝去。

（山雨楼調）

血圧降下に
アークレミン
錠剤
注射
山之内
血管アウトホルモンとアミン
山之内製薬

生一本の柳路さん

蛭子省二

岩崎柳路さんの主治医小川國手からお葉書を頂く。それには一筆も柳路さんの病狀には触れてない其日松代夫人から御永眠の通報があり驚く。急変であつたのだらう前に肺浸潤だとの交信があつた際五十歳以上の引揚者が肺浸潤位に罹るのは当然の境遇になつて居る私などレントゲンでみれば春雨程の光景であらう。大に氣丈夫に安靜療養して下さい。無理はせぬ事だ。川柳人の國手の診察をうけられるは幸だと申上げた事もある。モウ一ケ月も前か、久し振りでペンを持ち、私と川柳雜誌社へ葉書をかくとあつて、今では心臟が惡く歩行が出來ぬとあつた。丁度私も氣管支性が兼れて心臟性喘息に進展したといふ診断でヂキタリス劑の注射を行つてゐたので呼吸の難戦に就ては充分同情申上げた。昭和二年私は老妻を看護役と川柳行脚に出で各地を巡り東京に入つた時、当時川柳雜誌社の東京支部を柳路、千代二、駒人君でやつて居られたので初対面、詩交の始めだ。商会に勤務の側郊外で店を開いて居られ、私の申出で淺漬と味噌汁の御馳走になつた。旅がつづくと此種のものに新鮮な味覺が欲しくなる。一夕旅宿をお訪れ下さつたをり老妻と倶に本郷の藪そばに出掛け、私が大に醉つたらしい。粗末な木製菱型の盃台が氣に入り要望したのを、君で巧みな弁舌でヤット一ケ丈け五十錢位でわけて呉れた永く用ひた。

君は交渉事は上手であつた。京城、濟洲、蒙彊時代の追憶は余りに多い。成功者の一人であつた。

君は川柳雜誌社生一本で成長し他社とは全く無関係、こういふ行き方は現川柳壇には稀な珠らしい事柄、その性格と意氣がわからう引揚後の作品は出色あるものを見出し得られ油がのりかけた際であり且つ仕事上にも希望をもち再起を策して居られたから寔に惜しい哀悼にたへぬ。私は君から安全剃刀磨器を惠まれ、これが形身となつてしまつた。

微笑して答へず川柳柳路佛

私は宿痾の発作に悩む後日再び筆を採る。

ハカなかりし異郷の花よ

石原青龍

昨年頃、柳路君から京濱地方のどこかに轉勤して來るような通信があつたので久しぶりに――いな内地での初めての面会ができると心まちにしていたところ、その後一向に音サが無い、と思つているとツイ最近川柳雜誌で病臥中のことを知り、見まいを出そうとしてとりまぎれているうちに、とうとう間にあわないことになつてしまつた。同病相あわれむ引揚者同志で、ぼくが少しおくれて歸つたことがわかると早速たよりをよこしてなぐさめてくれ、川柳雜誌も送つてくれた彼の友情に対し、いまさらぼくの怠慢がくやまれてならぬ思へば柳路君にはふしぎなほど僕は愛顧をこうむつたものだ最初に会つたのは濟洲事変後の奉天で、路郎先生の歓迎会をぼくのきもいりで公記飯店で催した時、当時たしか撫順に居た彼はおくさんといつしよに先生のお伴をして列席したと思う。その時は初対面の單なるあいさつだけで別に大した話もしなかつた。その後彼はどうした先見の明があつたのか、まだ支那事変も起らない前の張家口に進出したということを風のたよりに聞いた。支那事変が起つて、ぼくが北京に轉出してしばらく、同じく張家口に進出していた俳友（同時に中國演劇研究の同志）故池上清水が北京に出張して來た時柳路君からのことずけだといつてぼくの川柳短冊を送つてくれということを告げた。清水の話では柳路君は在留邦人中に重きをなし、いろいろの公職に奉仕する外、川柳の方でも盛に活躍し、蒙彊新聞の柳壇も担当している――いや川柳よりも寫眞の方がより熱心でアマチュア寫眞界を牛耳つているとのことだつた。

昭和十八年の秋だつたか、ぼくが張家口に出張した時、彼の家を訪問したのが二度目の会見で、おくさんの経営していたカフエーで大に欲待を受けた。あの時きれいな女給さんとならばせられて、彼の得意のカメラにぼくのヤニさがつた(?)姿をおさめたのも「大陸生活」はなやかなりし時代の夢のような思出である。十九年の冬彼が北京に出て來た時、ぼくを訪れてくれたのが第三回目の会見で、ぼくは得意のショワンヤンロウ（羊肉の水たき）に彼を案内した。ところが好事魔多しで、あいにくその日は中國側が日本軍にバツを合せた「興亜奉公日」に当り、絶対に酒類を出さない。料理店で出さぬなら、他の店で買つて行こうというので、前門外の店々を戸別に探したが、どこでもガンとして賣つてくれない。二人とも「酒なくて」の人種だから、これにはスツカリ弱つてしまつて、セツカクのごちそうがスコブル味氣ないものになつた。「明日」を約して別れたが、何か急ぎの用があつたらしくそれきり彼は現れなかつた。これが柳路君とぼくとの会見の最後になつたわけである。張家口ではぼくの方に差支があり、北京では彼の方に用事があつて、ついに二人手をとつて、心ゆくまで痛飲する機会が無かつたのは、いま思出しても残念でたまらぬ。

思えば川柳を通じての交りでありながら、二人とも川柳のせの字も語ることなくして終つたのは「万里の異郷に相逢う」という大きな感激に圧されたものであるかも知れない。その「異郷」に咲かせた花が、極めてハカナキものにすぎなくなつた今日、柳路君の死はぼくとしていろいろと身につまされるものがある。爾後して逝つた同じく大陸ゆかりの柳友和田默然人君とはサゾかしあの世で話がはずむことだろう。いまのぼくにはむしろうらやましい。

めいふくを祈る杯さえも無く

柳路君を憶ふ

大島濤明

岩崎柳路君は十月上旬遂に逝かれたそうで、お名残惜しい極みである。顧れば二十年も前の頃、大連の拙居へ訪れて來て下さつた時初めて会つたのであるが、至つて物腰の低い優さしい印象の人であつた。その様な風丰の柳路君は案外積極的な氣質たつたと思ふ、満洲建國後鉄道建設工事が全満此支に亦そして起工されたが君は常にその先鋒に從ひ、鉄道が延びてゆくと同時に君の商場も錦州、兼徳、北京、張家口と奥へ〳〵と進出移動しその都度相当の成績を擧げ商況も漸次隆昌たつた様である。

柳路君はいたく路郎氏を恩師と仰ぎ、その言動に作品に常に路郎氏を欣慕し敬仰してゐられるやうであつた。又友情に厚い人で私が満洲から引揚げ歸還した際も遥早く愛情深い手紙をよこされ私の再起につき大いに勵まして下さつ

胃酸過多、
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社
クロコ印 武田藥品

ニキビ
にきびとり美顔水
桃谷順天館

たのであつた。柳路君が病沒されたと路郎氏から知らせを頂いた時急死だらうかと思つたが、昨春頃の句に

此の病氣には三千円のペニシリン　柳路

があり或は長いこと病床にゐられたのでないかと想像してみた。私の三男栄夫も昨年四月から九大病院に入院しペニシリンの注射に三千円かゝつたので此の句を記憶してゐる。

ステッキをへし折つて見たい氣のする日　柳路

これは本年六月頃の句であるが、或は長い間の臥床で心かイラ〳〵することもあつたらう。それをこの句によつて自ら慰められたのではあるまいか。吃度柳路君は以前から病氣だつたのであらうに、知らぬことゝは言へ一度の御見舞狀も出さず濟まぬことであつたと心に怕びるのである。

最後に拙作一句を捧げ君が冥福をお祈りする次第である。

君想ふ瞳へホロと柿一と葉　濤明

人なつッこい人

水谷鮎美

面接の機会の少なかつた柳路氏ではあつたが仲々人なつッこい人であつた。

満蒙の地図を拡げた御臨終　鮎美

川柳雑誌第十一卷を繙てみる昭和九年には熱河省凌源にカフエーモダンを松代賢妻と開らかれてゐた其後張家口へ移られカフエーオペラを経営され、盛大であつた。

昭和十三年路郎師が北支蒙疆へ川柳行脚に出られた時はその案内役に盡された。或る年の初夏居宅の兵庫縣下河原に夫妻が帰國された時に苺狩を催され、路郎夫妻をはじめ同人連を招かれて終日樂しみ溢れ宴会で騒ぎ二重折詰を頂いて嬉しく帰路についたことを今も直ほ想ひ浮べる。チョビ髭の柳路氏は人なつッこい人である、申すまでもなく川柳雑誌社創刊当時の同人綠雨、かほると共に三幅対の一人でまことに惜しまれてならない。

合掌。

東京時代

酒井駒人

十月三日雨の降つている夜「イワサキリユジ三ヒアサシスマツヨ」この電報を受取つた時私は愕然として暫くは声も無かつた。

大正十五年の夏当時、兄が勤務して居た芝の大成社でお目にかかつたのが初対面だつた。二三日して高田寺の自宅を訪れ一泊して翌日柳檀寺へ劍花坊師を訪問した。兄の紹介で川柳雑誌社の同人になつたのはその年の暮だつた。

当時矢はり同人だつた檜山千代二君すでに亡く今又兄の計に遇ふ人なつッこいあの廣い額も見る事君出來ないと思うと淋しくてならぬ。

支店

吉田水車選

（地）郊外に近く支店の暮し向き　米市

評、小支店の情景がよく出てゐる

（天）電報を打つて支店の灯に疲れ　鮎美

評、支店のかもす情景完璧

（軸）此上は停年が待つ支店詰　水車

選後感

今回の玉句は何れも同じ所をていかいして飛躍がなかつたのも蓋し総じて名詞的な題詠は想がせまくて損であると言ふ事が判るけれ共もう少し視野をひろめてほしいと思う、支店其ものを詠むのは結構であるがそれではきまり文句に終るから支店のかもす人生を取扱うのもやむを得まい其の意味で三光の作と対照していたゞき度い。

（水車）

本店へ聞いて見まさこ寄附を逃げ弓倒平
何時までも支店廻りで落着かず　まさを
支店長が関の山さと轉任し　登詩夫
強情がたゝつた支店落ちと知り　一郎
本店は東京と言う事にきめ　柳堂
支店詰になつて氣樂な椅子に就き　ゐいを
支店長だけを除いてストに入り　日漓子
復興へ支店も出した人通り　葉光
そのうちにやれると支店励まされ　三休
一通話ぐらいは支店叱られる　奇朗
支店へ一泊それから近い墓詣り　鮎美
人就職に支店勤務も承知させ　正司

評、人生また幸いかな

不朽洞から

▼尼綠之助氏（出雲市）は十一月一日に市の庶務課長に榮轉された、▼大鶴喜由氏（神戸市）は川柳の速成教授について執筆されてゐると▼石原伯峯氏（廣島市）は十月二十三日に長女弘子さんを儲けられ、「産声もやさしコスモス咲き誇り」の句信を寄せられた▼橋本綠雨氏（大阪市）は母堂の病氣見舞で金沢へ帰省され、安川久留美氏が病院に訪れられた久留美氏は元氣で近く退院とのこと▼浪玲之介氏（大阪）は十一月に協和精機株式会社の重職から退かれた▼佐野卜占氏（八代市）は十一月十三日夜、労働組合青年部の文化祭の審査員をされ、十四日夜は夏生、魚屋、銀風氏等と師走川柳会の相談をされるとのこと▼國弘半休氏（下関市）は十一月十五日、郷里防府の天満宮に参詣され名物の裸坊が年々減少するのを淋しいものに思はれたそうである。路郎先生が來関されてから急に川柳熱が盛んになり、下関駅の二等待合室に川柳展示会を企劃、市長の鉄道を明るくする運動の一環として協力することになつたとのこと▼永田里十九氏（布施市）が、柳界へカムバックしたが、ニックネームの「親分」は時節柄、ぼうりよく團のボスみたいで具合がわるいので、鮎美、水車、豆秋の三人が相談をして「おやじさん一」と云ふ愛称に改めたそうだ▼福田山雨楼氏（横濱市）は先年書齋兼物置きに一坪ばかり建増したが、それから一家が病魔におそはれ勝ちなので不審に思つてゐたそうだが、寢ていろ〳〵本を読んでゐると、それが爽鬼門にあたる〃とがわかり早速物置をぶちこわすことにしたと豆秋氏へ頼りがあつた▼吉田水車氏（名古屋市）は洞号を路郎先生の選定で草紙洞とされた▼戸倉普天氏（兵庫縣）方へ十一月廿日夜に鳥ケ辻川柳会の尾崎方正氏外六名が吟行当夜公会堂で方正、没食子、竹荘、三郎、斜水の諸氏が青年會婦人会のため趣味講演をされた由▼大森風來子氏（岡山縣）は久米雄氏と圓り十二月四日に、路郎主幹を迎えて忘年川柳会を岡山商工会議所で開催されるとのこと、盛会を祈る。

新会員紹介

十一月

山野星登氏（岸和田市）正
吉村静一路氏（同　）正
吉村南風郎氏（同　）正
東田晩鳥氏（大阪府）正
以上生々庵氏紹介
飯降白香氏（奈良縣）翠光氏紹介
中内翠芳氏（大阪市）綠雨氏紹介
西辻竹青氏（奈良縣）正竹荘氏紹介

高級化粧料容器には勿論！
ヤマキンの……
黒硝子
大阪南大宗區長柳西通一丁目四四
山金式株銀社
電話堀川四四七番

いのちある句を創れ

花地物語

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

川柳忌句會（本）

九月五日十三時
於 一運寺

初代川柳の忌日は九月廿三日であるが社の例会日の第一日曜に繰上げて開催した。

出席者＝路郎・東雀・六文・みのる・静一路・浪子・緑雨・美奈子・角堂・豆秋・香林・錦水・生々庵・亜鈍・野介・烏莊・美水・窓三・文蝶・のぶを・翠光・種美・小松園・鮎美・籌彦・紫香・醉月・没食子・竹莊・茂乃

兼題「襟脚」　麻生路郎選

くるりと廻つて拗れる襟あし　葉光
襟足のよさは妾のものとなり　香林
襟脚へうちわをつかふ蒸し暑さ　緑雨
マネキンの顔されど襟足の淋しさ　みのる
襟脚は見えぬ顔は見づにおきましよう　同
襟脚へ難波新地の灯は暗し　文蝶
襟脚へぎおんは宵の灯を点し　同
襟脚へ名妓の名殘り見せて老ひ　小松園
洋裝は襟脚などは氣にもせず　醉月
曲り角襟脚そこで見失しなひ　東雀
三つ指をついてゐり脚のぞかれる　野介
襟脚をきれいにそつて出かける氣　修三
襟脚のきたないとこまで親に似る　幽王
芝浦香を出たゐり脚へ糸の雨　野介
画家と言ふ眼が襟脚を見逃さず　翠光
襟脚にヤイトのてんがあるやな　豆秋
襟脚を見せて泣くのも妾也　路郎

あほらしさ襟脚へ惚れ脚へ惚れ　同

兼題「値上げ」　中島生々庵選

値上げして賣れぬ煙草を持てあぐみ　香林
値上げしてまだその上にストもやり　静一路
値上げしたのに大臣よく西下する　東雀
やい人民まだ食ふ氣かと値上する　籌彦
定期もう切れて値上が愚痴こなり　文蝶
値上するを待つてゆうく買ひに行き　静一路
見て置いたウインドもう早や値が上り　修三
値上げしてからのたばこが積んでゐり　豆秋
さうだつか上りましたかしよおまへん　野介
値上する度にまんじうは小そなり　醉月
佐野の馬鎌倉へ來て値が上り　角堂
病人もうす〳〵感づいてゐる値上げ　美奈子
又上り上り緣無き酒となり　豆秋
あすからの値上に一つよけい買ひ　浪子
値上とは知らずり錢待つて居る　みのる
不買同盟何処を風吹く値札かな　翠光
値上げの日ピース光　憩あり　錦風
値上した当座歩いて歸るなり　紫香
大臣ら値上げの一[illegible]知らず　豆秋
坊さんも言ひにくさ[illegible]上した　幽王
又値上げ祖母殺されさうに訊き　葉光
今のうち買へと値上げたほのめかし　のぶを
値上げ〳〵そうか〳〵と逆はず　鮎美
また値上言いにくそうに釣を出し　緑雨
値上され意地でも煙草止められず　生々庵

兼題「飴玉」　黒川紫香選

來客へ口の飴玉もてあまし　醉月
飴玉の厄介になり咽喉じまん　小松園
キユーバ糖飴玉にして子沢山　緑雨
辞書をくる口へ飴玉ほりこまれ　没食子
飴玉に歌舞技の幕をなつかしみ　みのる
禁煙のかわりの飴玉高くつき　竹莊
むかし〳〵の飴玉サトウに化け　葉光
飴玉を一つどつやる子沢山　竹莊
飴玉のまゝで慌てた電話口　小松園
退院の孫に飴玉買ふてやり　角堂
あめ玉へ子の慾両手に持てるだけ　のぶを
子が貰ろた飴玉父も娘も貰ひ　鮎美
配給の飴玉水屋にとけて居り　錦風
飴玉をしやぶりバーマをかけて居る　醉月
飴玉へ口笛吹いて子は戻り　文蝶
飴玉をハンドバックに見付けたり　美水
飴玉であしらはれてる應接間　亜鈍
安々と產んで飴玉しやぶつて居　没食子
お見舞に來て飴玉をしやぶらされ　紫香

席題「バラック」　須崎豆秋選

バラックへ船場の旦那住んだはる　醉月
バラックの屋根に南京二ツ三ツ　錦風
バラックだが直ぐに住めます十万円　みのる
バラックの穴を氣にする若夫婦　翠月
裏見れば皆バラックの戒橋　みのる
バラックの暑いさなかに兒が產れ　鮎美
バラックの夜の涼しさの麻雀よ　同
大金庫バラックへどかとすえてある　醉月
バラックでも一城の主人だと大あぐら　生々庵
バラックであるが嬉しい二人きり　のぶを
バラックの窓へ四角に秋の空　文蝶
バラックの中で博士も稼ぎ居る　六文
バラックに住んでも大阪いゝところ　美奈子
バラックとは言はず市營住宅地　烏莊
バラックでもうけて二号に取られてる　野介
バラッグの隙間に星の降る世帶　同
バラックの会社へ芋が匐うてくる　豆秋

席題「虫」　高鷲亜鈍選

夏の塀ヤモリは斜に考へる　浪子
放送が終つて虫にしたしまれ　種美
籠の虫遺言もなし秋の風　浪子
行水のどこかの隅で虫の鳴き　竹莊
悪い虫ついたと知らずそかそうか　野介
キリギリス野では自由の声で鳴き　美水
轡虫一匹飼ふて眠られず　角堂
虫の音をほめて恋しい人と居る　翠光
配給の米でも虫は容赦せず　文蝶
一坪の庭にも虫は鳴いて呉れ　同
野芝居の莫座かたトカゲ這うて出る　種美
昆虫館いかめし相に甲虫　修三
君感情を殺して蟲を聞き給へ　文蝶
甕きんな虫は座敷の灯を慕ひ　没食子
月の出へいどむが樣に虫が鳴き　小松園
停電へいつそう虫が鳴きつゞけ　鮎美
今鳴いた虫も雪いとく旅だより　小松園
草むらにブギウギ調のくつわ虫　のぶを
煙草盆ぽんと音して虫が止み　鮎美
虫籠へ行ひすましてキリギリス　生々庵
こほろぎへ寢ながら思ふこと多く　豆秋
廻りきて今年も虫が泣いてゐる　亜鈍
キリギリスピースに入れてもちかへり　同

秋に親しむ川柳會（本社）

十月三日午后一時
於 一運寺

本社の十月例会は一運寺で開かれた。いつもと変つた顔ぶれが見えて賑やかだつた。路郎師はその柳話で「川柳人の研究が、もつと学究的であるやうに」と種々実例を擧げて縷述され、裨益することが多かつた。川雑でなければ聽けない話だつた。（幹事）

出席者＝路郎・文蝶・案山子・聽松・默平・更生・静一路・正夫・瓜平・種美・里十九・妄夢・東雀・蝸牛・茲円・太路・野介・晴峯・草々・水客・美水洞・生々庵・烏莊・緑雨・美奈子・五郎・万樂・のぶを・茂・醉月・竹莊・晴夫・没食子・史葉・籌彦・みのる・栞・香林

兼題「客間」　麻生路郎選

無造作なあぐら客間の床柱　葉光
客間から妻呼ぶ声はおごそかに　幽王
珍客は客間を通りぬけてくる　鮎美
碁石の音客間は寢ないつもりらし　香林
廊下から客間へ娘手をつかへ　里十九
だまされて客間で見合してしまひ　静一路
疎開先客間の事もぐちになり　みのる
サンマータイム解けても客間忙しい　静一路
客のない時の客間は畫れもし　美奈子
客間から飲めぬ一人がねけて來る　草々
貰らわれる仔猫客間へ抱いて來る　錦風
政令と別に客間は時の人　文蝶

客間もう酒がまわつた声になり　同
來るたびに客間のあれがこれが消え」生々庵
客間へも聞えよがしの不氣嫌さ　同
世渡りのうまさ客間でつく〳〵見　聽松
客間では刑事手巻で主人待ち　籌彦
洋風の客間も欲しい儒けぶり　晴夫
鉄齋の僞筆客間を飾つてゐ　太路
待たされて客間の惡趣味眺めて居　瓜平
客間一人写眞ブックで待つてゐる　烏莊
オールウエーヴ低う流る・客間なり　種美
客間では対策をねる顔がより　のぶを
成立かあとは笑ふた客座敷　美水洞
山水を一本掛けて客間です　香林
貸さねども貸すとも言わず客間暮れ　万樂
客間まだ之から碁盤出すといふ　栞
客間兼居室兼々々に住み　香林
客間からのぞけばあるど鍬をもち　万樂
何時來ても客間の軸のヒン曲り　生々庵
土産もの出しそびれてゐる・客間　路郎
先代の写眞に客は見下ろされ　同

兼題「ハイキング」　武部香林選

ハイキングまだ矢印は続くなり　茂
ハイキング巡査横目で見て通り　聽松
ハイキングふと大声を出して見る　五郎
ハイキング重い方から食べさう　生々庵
ハイキング疎開してゐた村を指し　栞
共学の一群に逢ふハイキング　梨里
ハイキング天幕もバックのうちに入れ　竹莊
ハイキング世帶道具を背に荷ひ　晴夫
傳説の話聞いてるハイキング　竹莊
ハイキング中の一人は靴をさげ　靜一路
敗軍のようにハイキング雨に逢ひ　錦風
ハイキング父も案外若く見へ　正夫
秋の落葉へ天女のように女往く　鮎美
清水湧くここもハイカー知つてゐる　太路
罐切りと箸を忘れたハイキング　沒食子
ハイキング田畠は慾しい物ばかり　正夫
豊作の村ハイカーの歩が揃い　水客
ハイキング更に驛から子に寝られ　默平
ハイキング買出しぐせが抜切れず　幽王
あけすけに女同志のハイキング　同
ハイキング歌ひつかれて草にねる　蝸牛
名も知らぬ花を賞めてるハイキング　醉月
ハイキング今日坊主持と決め　里十九
ハイキング秋の実りの荷は重く　醉月
上り坂になると靜なハイキング　里十九
絶景を前にハイカー水を呑み　文蝶
愛人の足弱渓の水光る　鮎美
ハイキング滝の眞上の飯の味　同
ハイキング宇宙の廣さ身に感ず　靜一路
草の実を附けて歸つたハイキング　葉光
ハイキング大阪湾は箸の先　聽松
浮世忘れて尾根の景色に見とれたり　香林

兼題「栗」　正本水客選

したゝかに栗を喰たく街に病む　幽王
歌舞伎座で栗ぜいたくに食べたり　同
古里の小包ちさし栗の飯　葉光
風の音明日をたのしむ栗拾ひ　香林
栗拾ひ右に左に秋の花　同
栗焼いて隠居夫婦は寂とゐる　栞
橋筋の栗は丹波を恋しがり　美水洞
焼栗屋たまには派手な音をさし　太路
むし栗をちと無器用に猿は食い　瓜平
枝付の栗を土産に泊り込み　里十九
栗を焼く片手は秋の蚊をたゝき　万樂
果物屋今朝荷が着いた栗の艶　錦風
ゆで栗と招待券と許嫁　鮎美
弟と栗分けおうて本を読み　同
むし栗をかこみ夜長に話する　梨里
ハイキングの土産イガ栗一つ出る　同
栗買つて歸り我が家の虫をきく　万樂
栗を焼く匂ひ書齋は読みつづけ　同
ふるさとの栗がどっさり庭に着き　鮎美
お土産の栗がハンカチからこぼれ　沒食子
先生と生徒の火鉢栗がはぜ　鮎美
栗の皮本のあたりにむき散らし　草々
面白う派手に栗屋は煎つて賣り　同
女子寮の夜長は栗の皮をむき　沒食子
いが栗が猟犬の背に一つ落ち　案山子
故郷の噂しながら皆で栗をむき　聽松
栗二つ三つ火鉢にくべて叱られる　竹莊
永平寺くり飯ありと客を止め　靜一路
甘栗の土産自分も食ふ心算り　茂
話しながら頂きませうぞ栗を出し　梨里
焼栗は針差の上に置いたまゝ　種美
栗落ちる音ふるさとに寝つかれず　水客

席題「写眞機」　西尾栞選

寫眞機へ眞面目なポーズ氣に入らず　正夫
寫眞機の前で人形になつて居る　五郎
逆光のカメラへ若い二人なり　水客
寫眞機が取りもつ縁の君と僕　五郎
寫眞機の罪とあつさり片すける　太路
ライカを冬の湖畔へ背を向けて　案山子
スナップの構えに足をちとゆるめ　生々庵
寫眞機に又かと鹿はポーズする　茂
フラッシュにもうなれて居る時の人　史葉
ライカ手に二人は嬉し山青し　文蝶
笑らわしておいてカメラは記事にする　水客
人民天皇寫眞機攻めにされ給ひ　史葉
犯人はもう寫眞機へ惡るびれず　默平
一等はカメラの言ふがまゝになり　同
這へば立て立てば歩めのカメラ向け　栞
ライカーを肩に四十の戀をする　同

席題「内職」　土井文蝶選

内職でつかれた同志風呂で会ひ　案山子
内職のこれが我が子の着物なら　草々
内職へはひよる子供あやしつゝ　晴峯
内職の予定停電くるわせる　晴夫
内職のことも書いてる綴方　竹莊
内職に疲れてならぬ子沢山　綠雨
袋貼りボタン付未亡人生きて行き　晴峯
内職をして女房は澁くなり　同
内職で朝の勤めの眼を腫らし　種美
内職の金がもの言ふ配給日　默平
首になる覚悟内職へ精を出し　生々庵
子を死なしてから内職を止めにする　水客
妻のミシンもう内職の音でなし　五郎
十二月手内職の話が出　栞
内職が内職の値を聞きに來る　太路
タイピストの内職蔭で噂され　瓜平
内職が当つて妻の才を知り　同
内職に行くと言ふのにハイヒール　靜一路
疎開先でおばへた内職まだ続け　みのる
タバコ巻き内職だつかと手巻來る　美水洞
末つ子をおふて内職はかどらず　栞
内職の方が儲かる平社員　竹莊
一應は内職勘定外にする　烏莊
大びらに言へぬ内職官吏持ち　野介
内職の方か税務署からはがき　默平
内職で母のやつれた影を見る　東雀
内職のミシン彼岸の人通り　美奈子
内職の灯の細々と星寒し　野介
内職へ夜も更け行虫の声　東雀
アルバイトもう馴れ切つた声で賣り　梨里
内職の妻はきちんとひざを折り　妄夢
内職の上へバッサリくもが落ち　水客
内職で飼ふ鶏が産もせず　文蝶

席題「ボス」　互選

手土産の量を親分ちろりと見　妄夢
着流しでくる日のボスは拂ろて去に　同
税務署へボスは案外腰ひくし　万樂
ボス何か名刺に書いて渡すなり　水客
新聞に出て御近所はボスと知り　同
運動会ボスのお蔭で寄附が寄り　種美
二号三号ボスはでつぷり油ぎり　文蝶
珍らしく白足袋でボスやつてくる　里十九
ボス或日新聞記事を寒うよみ　栞
夫婦げんか近所のボスがやつて來る　更生
親分と云われ姐御に弱いなり　案山子
街録の声切々とボスをつく　五郎
商賣の弱味でボスの恩を着る　瓜平
こゝだけの話でボスをあほいて居　同
無理だとはボスも知つて引受ける　太路

阪田謄寫版

大阪市北区芝田町二五

株式會社 阪田商會

電話福島一六三九番

雑川　浜寺支部句會（堺）

九月十一日　於　長德寺

手紙・燒跡・鶏

拜啓益々御盛大と無心狀　松夢
借金の催促候　文で着き　文蝶
初めから留守をねらつた置手紙　生々庵
手紙とは別な心の顏になり　杭心坊
母の手紙一文字づゝが母であり　生々庵
燒跡のいつそ淋しい虫の声　文蝶
燒跡は女走つて逃り拔け　みのる
燒跡のトタンを越へたホームラン　眞佐男
やけあとに大人も交りとんぼ釣り　靜一路
鶏飼ふて卵の値段うなづかれ　みのる
紙の雪皇居に散らす藝になり　松夢
元藝人小屋掛のジンタなつかしみ　同
寄合えばみんな識つてる隱し藝　百生
藝人は心斎橋で見付けられ　眞佐男
落語家が使へば英語面白し　百生
今日たべる藝とも知らず雨が降り　晩鳥
親類の娘コンクールに出て氣をもませ　靜一路
身内なんかねーヨと家出した浮浪兒　百生
伯爵もこちらをたよる身となりぬ　同
親類などと言ふではないと念押され　生々庵
まわりまわれば親類だれ君と僕　同
急がずば遊べと叔母の茶はぬるく　晩鳥
親類へ言へない事の頼をせ　同
親類を迷惑そうにかしこまり　同
サービスは大將と言ふ声をかけ　同
続かないサービスだとは知りながら　百生
サービスのつもりが損をしてしまひ　靜一路
サービスはストがすんだと忘れられ　生々庵
サービスが過ぎて政令違反也　同
サービスのつもりレコードの喧しさ　同
サービスのつもり春中ムボンどうち　路郎
葬儀屋のサービス淋し骨袋　同

十月廿三日

藝人・親類・サービス

舞台に出る迄はたゞの夫婦也　生々庵
吾が家を出れば藝人らしくなり　晩鳥
紙の雪皇居に散らす藝になり　同
元藝人小屋掛のジンタなつかしみ　靜一路
寄合えばみんな識つてる隱し藝　百生
藝人は心斎橋で見付けられ　眞佐男
落語家が使へば英語面白し　百生
今日たべる藝とも知らず雨が降り　晩鳥
親類の娘コンクールに出て氣をもませ　靜一路
身内なんかねーヨと家出した浮浪兒　百生
伯爵もこちらをたよる身となりぬ　同
親類などと言ふではないと念押され　生々庵
まわりまわれば親類だれ君と僕　同
急がずば遊べと叔母の茶はぬるく　晩鳥
親類へ言へない事の頼をせ　同
親類を迷惑そうにかしこまり　同
サービスは大將と言ふ声をかけ　同
続かないサービスだとは知りながら　百生
サービスのつもりが損をしてしまひ　靜一路

雑川　日立櫻島句會

松茸・戀人・ダンス・香水

松茸の香りを乘せて車庫に入り　信二
戀人を信じ切つてる日の手紙　定美
戀人を呼び出す電話未だ空かす　一球
誰はゞからず二人濟頓堀を行く　紫雲
戀人の家族の数も氣にかゝり　清潮
停電になつてピッタリ止むダンス　定美
母の無い家を構へてダンス靴　呑水
香水がほしく娘も十五六　一波

雑川　あざみ婦人句會

伊藤定美報

手紙・化粧

親展とすればみながらのぞかれる　花子
あつさりと手紙一つでことはられ　良子
待つてゐた手紙もいちゞ胸にあて　美奈子
速達はあすから首にする通知　ひさみ
薄化粧浴衣の味も忘れかれ　良子
家柄は娘のお化粧を氣にしてる　同
戌の日が來てお化粧がなほざりに　若菜
抱きしめて見れば淋しい人形の眼　嘩子
人形をならべて友を待つてゐる　花子
吉日へ人形芽出度く届けとき　花代子

雑川　久賀支部句會（山口縣）

九月十一日　於　路三居

血・腹・嵐

鼻血見て勝つた子供も泣きはじめ　路三
血縁の味よハワイから來たミルク　稔坊
叱るにも血のつながらぬ声となり　白星
万と言ふ声に引揚腹を立て　阿房
この腹は別さとお替するウドン　三休
御隱居の仕事嵐の後の庭　同

十月二十四日

スリル・糸・許

窓を拭くビルへ秋の人だかり　路三
落ちる眞似だけで落ちない綱渡り　路城
渦潮に一丈二尺のろがしわり　水郷
島のバススリルを滿喫さと着き　朗々
母親は東京までも糸を引き　凡太郎
お針娘が眼でものをいう糸切歯　水郷
本ばかり見る糸卷の手を叱り　三休
風紐にされたを母は探して居　路三
樂聖はG線ばかり酷使する　浦東
旅廻り三筋の糸につなぐ恋　索牛子
一つ糸お目出度い灯が点る室　水郷
アルバイト閣の糸ぐすおぼえかけ　阿房
もうけるまでは特許氣狂ばかにされ　朗々
いたづら子許してくれる手を覚え　索牛子

雑川　大牟田支部句會（大牟田）

八月廿日　高田抱逸報

風呂敷・裸・午前二時・理窟

古着屋を出る風呂敷の不倖　水泡
風呂敷へこう包んでもマンドリン　薫風
宴会の裸よつぽど酔うており　抱逸
背を流し裸へ父の年を知る　星人
午前二時何か工場にあつた音　抱逸
近親者だけでお通夜の二時なき　水泡
親に似た子の屁理窟が案じられ　一葉
腕力と理窟でボスは街に生き　水泡
父さんの理窟へ母が負けて無事　薫風
もう理窟言ふまい父は老いてゐる　星人
面白い映畫一人で來たを悔い　つれ夫

九月廿日夕

のど自慢・トラック・実力・頬杖

表情が歌つてゐますのど自慢　青史
のど自慢倦より下手なのも唄ひ　清秋
拡声器抱き込む様にのど自慢　凡生
臀圍のトラック滋雨のやうに着き　常夫
此の世相実力だけで暮されず　柳城
実力の無さを政府の故にする　内海
四段を投げて守衛に引き拔かれ　抱逸
頬杖のまゝで受話器を取る社長　星人
頬杖の看護婦さんは故郷のこと　薫風

駅長・めくら・理窟・沈默・値上げ

踏切・まゝごと・冷汗・相傘・買出し

駅長が出迎えに出る人が降り　不朽
列車事故駅長走るばかりなり　久米雄
幕が下りめくらめきを指図する　天嵐
子には子の理窟があつて泣きやさす　聰夢
理窟からいえば寄附なさせにすみ　七面山
駅長を出せと元氣のよい理窟　聰夢
沈默を記者無理矢理に記事にする　同
損をする話になつて口を出し　弓削平
新妻に氣の毒な程値が上り　久米雄
今日からは値上げ窓口素つ氣なし　九坡
遮断機の向うと話すいゝ天氣　鳴郎
まゝごとも今日はお米の遅配です　北路
まゝごとにインフレらしい金使い　久米雄
まゝごとの子に庖丁がきれ過ぎる　不朽
まゝごとへ裏のトマトが一つ減り　九坡
冷汗を流し閣屋がやめられず　稔
冷汗をかいてポリスの前を過ぎ　北星
冷汗を感じた方が負けかゝり　久米雄
相傘は女の足に合わせられ　同
相傘は雨の止んだに氣がつかず　九坡
心ウキ〳〵心ドキ〳〵相傘よ　大甲帽
買出しもいといませんと好いてゐる　北路
買出しへこんなに巡査の多いこと　一歩
買出しのどうでもほしい眼つきなり　久米雄
買出しもする氣か風呂敷二枚持ち　正一

日の丸句會（鳥取市）

九月二十日

青年・虫・サービス・学生

青年の恋愛論を呆うと聞き　秋男
青年の複雑怪奇な夢をもち　盈之
子もすでに朱に交つた二十台　重美
星空を行けばうしろで虫が鳴き　日滿子
バスガール子づれ〳〵に抱いてのせ　重美
初恋の頃の寫眞は金ボタン　同

学生時代とは挨拶の変りやう　榮夫

十月十五日

硝子・夜の女・街頭錄音

硝子越したしかに此の家金がある　重美
操賣るこんな女に誰がした　同
產制の街錄え吐く子沢山　盈之
街錄へ知事も一と役買つて出る　貴美女
街錄の意見さくらが居るらしい　秋男
街錄えポツリ〳〵と氣の弱さ　日滿子

DONのタ

九月廿五日　於　ドン喫茶店

虫

滿ち足りた恋虫が鳴く月が照る　翠光

ほつて置け觸ればすぐに鳴きやむぞ　路城
トトさんもカカさんも無し虫が鳴く　豆秋
鳴く虫へあはれは人の痩せほそり　鮎美
ふと立てば素足を包む虫の聲　香林
旅に來て虫に訊りはなかりけり　水車

白鷺川柳会（姫路）

八月一日　於　燕子居

朝顔・露・氷屋

朝顔のみすぼらしくて畫近し　二葉
朝顔の思ふとほりに窓へのび　一笑
買出しに急ぐ山路の草の露　樹市
僕の家氷屋だつたらよかつたに　播水

八月七日　於　一笑居

團扇・七夕

七輪のうちわの鮎はやぶれたり　揚市
供へ物自家農園で間にあわせ　和水

八月二十二日　於　燕子居

二階町・便り・ネクタイ

二階町一文なしの顔も居る　雄坊
二階町よそゆき顔の母にあふ　樹市
友達のそ知らぬ顔も二階町　揚市
二階町名菓伊勢屋はどこへいた　二葉
二階町妻と歩くも久しぶり　一笑
二階町現行犯を見て戻り　同
便りより先に父親家につき　凡夫
ネクタイを呉れる彼女が欲しくなり　燕子

川柳不朽洞會

指導　洞友

麻生路郎

賛助

池澤樂居　長谷川一徹　笠原路生　高嶋米峰　長野晴濱　藤村作　淺田一

高尾亮雄　山本雨迷　安川久留美　山路閑古　前田伍健　柴谷宰二郎　末弘巖太郎

鳥山一歩　沖野岩三郎　亀井晟修　田村孝之介　浪玲之介　小川靜觀堂　上田翠光　米本貴志子　大西八歩

蛭子省二　西島○丸　麻生葭乃　橋本綠雨　高澤一浪　石井白面人　戸田古方　前山北海　古川魔花麗　岩崎山石

中島生々庵　奥村丹路　武部香林　戸倉普天

中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　高安六郎　藤村雅光　田中辰二　高鷲亞鈍　澤田四郎作

不朽洞會員

—特別會員—

藤井友郎　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　村松夢裡　大坂形水　藤岡至藝　井上湧三　中西おさむ　岩崎松代　宮田不二　福田妄夢　西垣錦風　岡村路三　山根梟人　川村好郎　濱田久米雄　丹波斗士　好崎申仙　木村孤浪　築山快夢起　西尾栞　山東路城

—維持會員—

福田山雨楼　寺井鋭々　高澤一浪　石井白面人　戸田古方　前山北海　古川魔花麗　岩崎山石

—正會員—

市場沒食子　吉田水車　須崎豆秋　石曾根民郎　上田翠光　小川靜觀堂　正本水客　黑川紫香　竹内潮花　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　中島鐵洲　木下幽王　吉田斜水　岡島嶺泉　久連松春月　大鶴喜由　村上角堂　坂井楠水　河野甲東　大森風來子　佐野卜占　藤田天風　東田晩鳥　科埜種美　蒲田鈍太　紺屋島無人

永田里十九　鈴木九坡　岡崎祥月　土井文蝶　小田垣蝸牛

鈴木石鹿　夷一笑　弘津柳慶　糸本醉月　福島正則

高田抱逸　稲葉鳩花　吉田圭井堂　多田一波　藤田わたる

井村寒浪　小坂慈雨來　小林文月　大塚一球　富岡淡舟

小川恒明　杉谷湖山　早川聽松　石原伯峯

德永雅美　增田耕民　白牛奇朗　山野星登

國弘半休　山分北路　吉村靜一路

八竹正柳　佐野卜占　月原宵明　東田晩鳥　飯隆白香　中内翠芳　西辻竹青

大森風來子　小澤史葉　大西野介　山口秋花　鈴木みきを　橋詰東雀　篠山籌彦　渡邊孫拙

河野甲東　小西無鬼　亀山晴峯　尼綠之助　水谷竹菲　水谷琴水　小橋隆如

南鼓扇　岡田紫雲　種瓜平　野本呑水

品質優良

ペン先
針ピン
ゼムクリップ

立川ペン先製作所

市野上

編輯室にて

急に寒くなつた。しかし句は作れそうだ。いゝ句を殘すこと以外に何もないと思ふ。私も今度は少しく餘分に発表してみた。

○政界も淨化しなければならないが、柳界も淨化しなければならない。名古屋あたりもブス／＼くすぶつてゐるらしいが、大阪ほど、あくどくばないらしい。

○本號は柳路の追悼號にした。故人と特に親しくしてゐた人たちがすすんで筆をとつて下さつたことをうれしく思つてゐる。山雨楼君が柳路の略年譜や「川柳雜誌」創刊号以來の柳路句集を編んで送りとどけられたことは感謝に言葉もなかつたが、スペースの関係からその中から僅ばかし拾つて「柳路句抄」とした。諒とされたい。

○私は十一月の初旬を九州への旅で暮した。うちにゐても忙しいが旅へ出ても忙しい。帰つたら、輪をかけた忙しさだ。八代では卜占君の自轉車の尻にのせてもらつて走り廻つた。これも生甲斐のある忙しさだつた。

○大和の不朽洞山房で、徹夜句会をやりたいと思つてゐたところ、翠光君が幹事役を買つて出たので十一月廿七日の夕から、廿八日へかけて決行した。その内容は何れ新春号で——。

（路）

——動　静——

▼本社では十一月七日午後一時から一運寺で「川柳作句と話の会」を開催、生々庵、鮎美、亜鈍三氏の柳話があつた。▼路郎主幹は十一月二日午後二時から大阪市交通局文化祭の川柳会で講演、翌三日は大阪府市共催の藝術祭に出席された。▼路郎主幹は十一月四日午後七時半の鹿兒島行急行で九州川柳行脚に立たれ、五日に八代着、八代を中心に、熊本、人吉、大牟田、日田、博多に足跡を印し下関を最後に趣味講演を終了、十四日に帰阪された詳細は次号に▼大阪逓信病院川柳会は十一月十八日午後二時から三階図書室で開催、路郎主幹出席▼川雜阿倍野支部句会は十一月二十日夕六時から例会開催、路郎主幹出席▼堺市民川柳大会（堺市主催）が十一月二十一日午後一時高須神社で開催生々庵出席▼川雜浜寺支部は十一月二十三日夕六時、生々庵居で開催、三面子の十三回忌にあたるので故人の二女山岸敏子さんを囲んで忌を迂生この度の錦地川柳行脚に際し、格別の御歡待と御支援をたまはり今なほ御地にあるの心地がいたしてをります今後共よろしく御交誼の程願上げます取敢えず誌上を以て御禮申述べます

麻生路郎

九州川柳人各位
下関川柳人各位

修した路郎主幹出席▼南海電鉄川柳会は十一月廿四日午後四時から開催路郎主幹出席▼扶桑金属川柳会は十一月廿五日午後四時から開催路郎主幹出席▼川柳私社第一回句会が十一月廿四日午後一時から雲水で開催▼曾我廼家五郎、南木芳太郎両氏の追弔会が十一月廿二日午後一時半、四天王寺本坊で修せられた▼大阪弁第二輯が大阪ことばの会から刊行▼深井凡々氏（奈良縣）は三十九の誕生日を祝する集りをされた。▼山本葉光氏（大阪市阿倍野区王子町二ノ五三）はあの不自由なからだで時計の修理に再出発されたとのこと、時計が狂つたら是非同氏のところへお願ひしたい▼竹田芦穂氏（大阪市）は公用で十一月八日湯原に出張、「暮れてから砂湯女の声になり」の句信を寄せられた。▼逵水眞珠洞氏（福岡市）は東上、井上信子女史を訪問、十一月廿四日に帰阪された由。

募　集

課題吟募集

（十句）石曾根民郎選（一月五日締切）
出張（十句）大西八歩選（一月五日締切）

毎号募集（毎月九日締切）

近作柳樽（雜詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雜詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雜誌　第三卷　第十号
一冊　金一〇円（送料二円）
年ケ年概算　金一一二円
半ケ年概算　金二六円
昭和廿三年十一月廿五日印刷
昭和廿三年十二月一日発行
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
編輯兼発行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雜誌社
振替口座　大阪七五〇五〇

清談・商談・お待合せに
喫茶　みどり
上六交叉
點西北角

趣味と教養の殿堂
松坂文化クラブ
會員募集
課目
茶道（表千家流・宗偏流・花月庵流）
洋裁・書道・日本畫
舞曲・聲樂
手藝・古典・新舞踊
長唄・小唄・謠曲
服飾デザイン
詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ
松坂屋
大阪日本橋
電南一一七一番

おなじみの楽園
あやめ池温泉
愈よニユースタイルで復活
大浴場・子供遊戯場・娯楽室
喫茶室・休憩室・有料会議室
映画場・大食堂も近く完成予定
完備
上六より往復　¥70円
近畿日本鉄道